金蘭集

へ 5
1178

金葉集もて加賀の万子か
一童に櫻花の其画ありしを
かゝ藩学者に名えりとて
中に芭蕉の俳諧百余章を
あつめ給ひて我國の清は一集う
写し傳て既に院中に宝収
せしを後に越の耳井子
さほく二子梓行に志あらし
かれ孫は其事を遂ずして
久しく世をまて惜まるはる
を南無庵にありし深くこれし

なしておきぬ集はもれたる派
句ともも拾ひあつめたるを
写のあやまりをもおほし
ことばのちかひをも千
里わかるみちのさむや
かくはうつしてみるに
あてられひかまてあるをさそれ

文化丙寅春

みちのく南部

北溟識

明治三十九年一月二十九日 木谷弓彦氏寄贈

凡例

一 編次ハ大畧年序の序を考へ文年月を明にせざるは風調を考へて之れをとるのみ

一 異本によりて遠ふるは其假名本に從ふ其本年号しらるるは本年の條に記す

翁の自筆又ハ其時乃俳書のうつしを写し得たるは是を記して其人の名を記す

むしをき句集に明らかならざるは

○此下し是なるを後人の附会をはしらず

一 桃青芭蕉翁と記しあるてよ年乃遷りくすのつるは其時代をわからぬ也し

一 お年のほどもせずにあつめしたる人のおもひおもひに思ひをもとめて文を発

句吟しかくまさハ世にあるへし
千代見草にも是をしるせり
一 歌仙脇第三よりも翁の句あるは
一巻を畢しるしおきぬ次
一 附句斗集りたれハ又ハ吟ひ侍しを
跡ハ其作者に任せ
一 松しまの独吟歌仙ハ奥州大石田と
いふ所にありて須賀川の等躬か揃
普流といふ者譲りうけて京都にある
よく隠家やめてぬしを好の処乃
春よ花の比梓行あらん好の望ハ所
也し奥州よりも須賀川の因縁ある
等躬より伝へ持侍るも一説
あり 勝負雲滴の海たまふく翁の自
筆あらす 疑はしき処 松島独
吟ハ仙化か吟風詞に似たる是
梓行乃半はかりのことなれハ
一 吾宝江津の歌仙其所にハ云伝を
三つ物そろへ翁乃真跡なりとて今

平か秘蔵なり 菜様の発句も
脇平みしくあまある表読あり
四句目まてハ前しこ脇ハ前なる
又古乃中より拾ひよし
一 いさゝか鷺かみゐる 素外といふ
歌仙ハ秋風か気そ憐み敷せる
跡其作者に写しおくしぬか続様蔵
ゐは鷺かみゐるあらしさふとなて
里圃か句に於ハ撰集の時又里圃か
句をなしめ入るなり 翁奄ト倒ける
人々古代のせうてあまと云句ハ奥別
なる久まく翁乃句なりけるを草良
也巻を示しあへるとなりかゝる敬文
撰集の時再案をまつへし
三ツ物
発句ありえさ哉 桃青 花の雲
歌仙
鳥声あるやあらしよし 桜あさ
去来句
世をみとこれ身おそし 柳原
歌仙
まくやさくるとやまと花の雲

門 へ 21 5 號 1128 巻

是六句
風色やしどろに植し庭の秋　翁
露深く椋の木枇を剥木あれし
鮒鯉くいばさまれも見ゆるにか
百く取しも燃る迄おぼろへし
好手の人払う可し探補して

浣花井　耳卅

早稲田大學圖書

目録

月乃春秋　太百韻
旅人と我名　ちらしを
あつさや　松風に
右五十韻
松の色　詩あきんど
菫よう世　風彼口に
附ぞなそ　時ハあれ
麿走を　冬京や
風の音さ　星寄や
狂句あらしに　霜月や
炭賣乃　はつえりて
初霜乃あとし　京まそい
海鷗く　竹の木乃
粟稗に　はなしさ
ひるを　初あきを
ふあつけて　何とハなしに
蘿の　秣負ふ

風流は　隠世家かり
さびしさの　五月雨哉
先つしや　あつき山や
きうらや　清寺乃
うらりく　むら泊り
茶咲て　鶯よし
紫陽を　柳小杉
衣裂して　鶯や餅に
かまろふ乃　いさよ候
うれりし記　梅若菜
市中八　灰汁桶の
鳶の羽も　今日斗
月見る　ままくても
外からや　口切よし
洗足よ　子規ちく哉
色くれ　杜若家よ
久方や　萩の手より
木目を　秀るく

右哥仙

貞享三年丙寅正月

日の春をさすかに鶴の歩み哉　其角
砌に高き去年の桐の実　文鱗
雪村か柳見にけり棹さして　枳風
酒の幌に入あいの月　コ斎
秋の山手束の弓の鳥売ん　芳重
炭竈こねて冬のこしらへ　杉風
里々の麦ほのかなるむら緑　仙化
家栄馳よ雨おほひせよ　李下
朝まだき三嶋を拝む道の者　挙白
念仏に狂ふ僧いつくまて　朱絃
はずかしく連歌の昔をはずしけん　蚊足
敵寄来るむら松乃声　ちり
有明の梨打烏帽子着たりけり　芭蕉
浮世乃露を宴の見おさめん　筆
憐まし梅の木槿乃籬かな　翁
後住女おぬさし折く　角
山深く乳を呑猿の声悲し　鱗
命を甲斐の筏そ見よ　枳

法の土家利楽を埋て並む
そつりしの辺を見川か艸の戸
さく月ら車かそゆる花の陰
はしる小雨とも消るかあろふ
雪残る東山子の路しく
隣の小隣く嫁をみる家
夜寄るね守さうつる鉢あけ
恵み多る眉を隠し衣く
墨子唄ふ情まて見る宿ちぬや
藁谷の風竹ふ矢ぐ路切まて入
かりそて下手代至る瓶口子
あわれ身靠の墨かつき
石乃左極龍る此坊主信徳く
我こ代乃刀并能治
形孫八金みし 松の兼
近江の田植男隣まちん
痕きく中の衛士の牟を聞
船よ舞此湯乃浦寄るう
饒業まて人の姫をめし連て

扶 寸 於 化 陰 白 り 蔦 枳 斎 角 鋪 白 下 化 陰 星 角 下

孫勤乃堂に出かひ并跡
侍宵の陸は墮る草此中
夜よふ燈乃あうきの髪ま
雨まへそいやしきる鄙是
門を魚石を破際乃寺
理不尽よ物千武家六七請
あし堅て牧乃沛呂撲ても
賤の芸る夕日と月よ改めて
孔乃館屋秋寒ぶなり
稲妻乃本此君と色の公家を
つきれきりし 里隣まて夜露
人あまさ年ふ尚をとらまれ
滝をとき懸よ金山の洞
此世の武仙と名ある恵まかきを
条より汲まる醒井のみ
玉川やおのく 六つの所あん
江湖く主も家よ かあり
雨の色此紫糖も讀るの氣
然ふとふまえ 蓬さよ像

揚

枳 蔦 化 歌 白 室 角 鋪 下 白 枳 水 法 角 斎 蔦 化 星 永

南むく蔦屋の細乃あれ消て　不卜
秋を嘉とも川音のさまく　補
餝化るなしの床掛を打合せ　桃
贄かりし置るし秋のこゝろえ　蕉
康乃芳をおいてぬ人もすつめ　弦
みくき男乃新枕を月　卜
皆乃雨被七里をぬらすらん　下
伊駒河内の見せ川つゝ　氷
わ草乗つく者ハおかしみて　角
盗ハちからの院しく残字　千春
二月の蓮葉をすさめたや　舟
婦徘牛乃おそき日の影　里
胄あハぬ鍼乃縮を織兼て　蕉
いおもひあかしや萱比刈さし　凡
蔓の花を志らうる寒て纏る谷　銚
木魚吟拝る山陰みしも　下
肉をやうく休むる竹の月　新
秋さしあしと長ゝ流きあれ　卜
宮した霜と礼まるを付く　春

包なりし案ハ蝶のうゝ　法
三度ふむすゝの桜吉野山　化
あらし八束ゝ草の露を分　下
領掛をえきぬきのあきとし　鍼
徒よミ留ふ落比ゝ川へ　里
升涌き無物ふ帰るかたもく　白
梅まさ若さ句ひなりけり　新
むしの東石乃竹ふみ消えぬ　峡山
抱とる秋の沖も志川うり　化
伊勢をうる月ふ初日比日籠き　卜
擽ようあまく橋流るあさき　下
伝ちの治まる世やけゆらん　皺
居士とよそ哉く柳しゐの咒　春
あふ牡丹千里比香をみて　山
乏きすむ岩にある湯をきく　角
岩根ふゑき地藏を蔵まて　新
ワしや三井乃寺法師花　化
香ぬ立つしおきゝやつゝ返らし　〇
簑法をちかれ宵ハ泥る　里

足川の房山よ泊まさひしさよ　秀
千鳥をなするる鈴書の法名　泊
舟いく所澤ゝ在りの川伝ひ　風
をもそこまよる　其北白鷺　山
庸庭乃七寄よ綴る花白く　卜
達一筋くりしの家を冬ゝ交　白

十月十一日餞別会

旅人と我名よばれん初時雨　芭蕉
亦さゝん花を宿〻にして　由之
鶺鴒乃尾はと無の為けし聟　其角
霜とかける山陰比霧　枳風
うけなから芝生の露代の縁　文鱗
新し奔葺月よまいそや　仙化
中乃秋画工一つき悔るなり　臭児
舒てもしておくる薄舟　観水
菲垣や吹身よひくき波の声　全峰
鈴と縫しれ　男ヶ刃雲　嵐雪
酒のさま甲乙女達の並居く　枕筆
卯月乃雪を掃つくる森　菟
纁つる袖つくばう早瀬川　之
蘿一面りのころ拷梚　角
そこ志らぬ里よ旅をとうさ刊　凡
月やや噂うん泊瀬の篭人　鰯
菖蒲竜扇く白ひも数あつく　紀
おもそ勇事を祝ふ偶偈　崎

遠耳にきこゆる車の音を寒て　蕉
沖こく舟よ見えさりしハ誰そ　之
花ゆへに名の付く波ぞ時しらず　雪
別れし扇と成ても琴の手　挙白
昨の筆走りし浮世の外よ入へ　丹
萱代ぬあめの雪を焚く家　化
老の身乃亀甲よ縫よせらるゝ　之
君流されし鏡の帝台　蕉
内寄ハ千浮の松とうゝく浮く　白
命をとありく船よ這ふ蟹　角
都のかくもうまつかん海のなき　雪
志ゞ雨御ちるを稲妻有明　丹
葉や石ふむ坂の日にしほれ　峰
中畑さひしき常山子御らん　风
芋のこ乃むるを酒債ニあてし乃　蕉
きるなる里をさすよそしける　向
薫乃立めん面白き夕まみ　化
懐にて氏乃立ま　角
爪牧なて笛吹めてる帝夢　峰

俤ゐかしく櫻よさ次哉　风
兄若しき文字代子昂を嘆て　角
境乃おしき留をあつかる　雪
隠家や寄居虫の友の交らなん　丹
筏ゟ出る池苔ちる風　蕉
苔深き日うしハ海の木芽のを　白
茶のちらゆめる岩の山菊　之

しをらしき名や小松吹萩薄　芭蕉
露を見知りて影うつる月　コセン
踊るを淋しき秋の数ならん　北枝
よしある家と宿乞ふ夕暮　斧卜
着し香やおし詠なからも寺の澤　塵生
あらしけり無常をしる鳥一羽　志格
波あらしお獅子草の名を捨ひ　夕市
雨ふりし御溝の虫をとらし京　被益
多磨川松より行くの穴八葉　観生
と合親しく物くれて名　曽良
榛乃村くハ草葉のへ里　枝
菜をとり出むしやはしし夜の月　蕉
夕雨乃無き盆乾く金ちる　卜
子を蒙清くも雑かし学　枝
侍の姿みつき社令なり　コ
その鬢ある小走濤乃母と寺　記
涸まされ肉まて豊の光しそ　格
渡もさ栗々と費く味よ　市

粉香も糧乃庵やかりくらん　益
常病らけくはし家る塩　生
帯より包ま唐をむとひら曲　良
ぬるむ清水り流よ黒米　格
春露あ継挽ましよ人かちて　枝
うらちてら雪よ雑夢青き　市
一株よ折まくおり母三日の月　蕉
秋の霜おく家眉のら　コ
簑あり庵の袖の潮宮よ　生
恋り山よせるまくてん　卜
忘れ草青のみれ乱うへ宿せり　記
思ひさねし清雨乃板敷　蕉
阿陀まりも身ちあし幸家　枝
宮後のさ哉れ志く様しき　良
写ひく年れ良ハ志まて　コ
恋さ夏くの種のせ花して　記
大さくハ梅ろ傘まつる　蕉
庵より所る町の白壁　益
洞れく哉鼓さ添て涼しやれ　蕉

花流とも以ふ女ごて以ふ　卜
古き多草のそれとも知らしき　帝
なまめ乃清て寝やあらん　コ
出とろまゆかしく暮とを消し　其
それより草をして戯とを支　訳
うえ江次の花さ蒔まき取あり　良
うらくしくやちるさ江の山　枝

園風
曉や雪放すきめく藪月　梅額
煙ると澁る橋乃けふある　半酔
磨なむ人寒さ雨にあて居て　士芳
かきり杜丹の名をと廣めあり　良品
歎くくよ間さる事の上手あり　風麦
扇乃角とつまむ宜しく　芭蕉
春よ何よ蒔絵乃鞘と持草て　木白
左川寄り将監の蓑　歌
馬の蒔ふまへてすれ梅の色　配力
おこ花おもと志め縄のうけ　叉
伊セの海よこ川喜楽を新さき　風
敵乃首数れくみたに　芳
村人を実の莚りきつまで　示
錆に門徒とるゆりけり　酔
造り出も今年の酒は甘口　力
月をと名付の影寒きあし　楓
妹りや湯よ積藁の生茂り　麦
ふき手ちかし庭の花茶

こかしよ楽む衣裳を脱捨て　萁
おしろき衣傍路の汁　芳
此花に庵とかれ今も見ん　白
肩に捨ぬる竹の早蕨　歌
討る雲間にうそん里帰　風
放して絲追ふ春の衣　麦
葬礼に志はまして笄も京　不
女嫁ぐ竹の戸の内　芳
後朝の声の子共稀を頼て　萁
背中が寒く添ふらるる　呑
何角ある猿の巾着借りはき　歌
すそとひろぐる柳沢の泉　力
卉揃ぬ皆く烏帽子傾て　白
涸ころりしや歳の暮　法
七夕に星とかける深服衆　風
家賣て母とあるき有明　麦
柿の木も枝も分てかるとはげ　妻
艶てすまめし名や聞ある　芳
修行者の蹈迷ひける峯傳ひ　凱
小斗の星を包む村雨　心
雪の鳥群寒く鳴かん　法
松に一本山の神く　風
乞食して花に誇かる流走書　萁
雑子みく逃てきいさとまさ　芳
寿命りけかく離の遊てそ　力
思い経方はし山吹と摘　麦
伏てぬいたと猫なりけ片側を　不
家ぬしの来て琵琶の名字　心
刈かく菖蒲の隣子さえ深　芳
月の廛吹て昔よ夕影　風
月の前志をくし身の盃しき　萁
酒ちらく悪のいきひ　力

客　柑　色

元禄七年九月四日　猿雖亭興行

松風に新酒をすます夜寒哉　支考
月もかゝらぬ石垣の人　猿雖
町のつゞきに庵の花鋤えて　芭蕉
それも中々乃禮と聞ゆる　雪芝
七日とも覚てまゝゆるし門くゞと　惟然
此山からく質船でまかせ侍　卓袋
蕪おもなる芋麓の風ハ切なり　望翠
床〳〵あたまをとう〳〵と刺　芳
夷藤縫乃を着をまとはせ　雖
喧嘩の中を無理に月の出　芝
仕合と矢板乃西をそる春の人　蕉
あやけと僕の何そ雪ぅ縫ら　翠
やかくと浮子を並べつる屋く　袋
大工屋板や乃海の筈すき　蕉
用の日附ハ身もむ萩となり　考
面乃降日比節ぬゆるやら　芝
隙窓を捨き杢いつき初めし白　然
親と此あまを去りていく秋　考
月影も又々返る七兎念仏　翠
身をさぬきん此話のひやしゆ　雖
咲き多く無き嫁を連れゆき　然
傍光ゆくつまき椽けきさ　袋
寒と猟乃やめの新子古て　芝
内使乃箱る子なあちおく　芳
石場の門乃さし入みてきに　雖
一里代み七後乃あきさたる　翠
山ハみ子寒稗の名代黄に嫁く　蕉
日あはくく新白の案露　芳
西方まをうかくて月乃物体し　芝
嵐乃こゑ我巻葉けから　然
侍卑乃髪を鉄会で撫の面　雖
看おかうほと酒ハさっむなり　芝
小倉とハ包ひ合をの下乃雨　然
先夜の別ぬ人死らあらわ　芳
川きさまを日の月比鍋凌く　蕉
歯かけあしき乃雪を埋ゆる　雖
粥と今ハすそまう　かそせ振　翠

かもん乃葉志川ともしと呑　蕉
浩ちとまくろく乃せまゝて　孝
こほれくせくる朝の出女子　紫
稲のよ葉滴ちと尼の葉　雄
飼も次第よ牛ハ散流く　芝
枯もせ止婦るたなき楠の枝　布
月見よ此川も造作せゝるも　秀
かゝるを由しくとする秋の風　篆
濱乃小家をとるゝ志方さめ　於
懐ちゝ九おゝしくくゝれとけ快　帒
いそな乃朝よ去る豆腐売　秀
雪隠の宮も歌くむの被　雄
枯芦涛よひよ鶯の啼　芝

家松しちの私とゝめるを出る庵
かゝる家内の海士人宗匠く
松の花白髪見るよ来る庵かな
汲千代孫を歩くゆく嫌
風巾日乃ちらくくよう川ろひて
月斤ハ此ハ鐘よ急ぐて里
磯ハ只何ゝよしの艸もみち
無とくかゝし松原し霜雪
比しも懐乃酒ぬるく成ゆり
否めむ久お乃度むろはく話
一夜ましい女の同じ家の中
とのひくよ消る蛍そ
いろくよ葦の付く神の灯やり
石なき川よ本堂流家し
連ゝて猿をも来番と石の等
月小黒もをいろの西出と
新らの女きハ笑うはおよや
也乃ありよまくく年まゝ
ちあまハやすきを常代住所
嫌乗とそろえ財ほ　芝

須光乃種をも取て雛比友
几牲にもえぬ以來かりもの
行云ぬハ位にあへる懐まで
年とる世り謡子の文なし
憂身とて付見此勢は鬼ませ
泣く山と追てゆる主見
寂光庵ノ何事ノ淋ノ宮の月
祀念の袖すりつむ稲出
百頃店比木槿垣に吹つらき
捨法を積て来る舟に流
約偕ひ紀の貫之にお酒盛て
類一くさり持ておなり
お打ちる嵯峨乃富や宿の古
空乃お渡ハねむきほゐ
葉の砧おのか新に根もぞ
吹雪の袖をふるも見て
松井乃冥加を買ん宇の市
暦さぐる　暁乃雲
右八嶌紙於吟のよし

詩あきんど年を貪る酒債哉　其角
冬湖日暮て駕馬鯉　芭蕉
干張き声に関を申すらん　〃
三線人乃鬼を泣しむ　角
月ハ袖かうろぎ啼る絲の上　〃
鴫乃羽しばる夜ハ深きも　蕉
馳走下ぬ俤を笑ふの蚊屋　〃
しら山峰傘を寐　角
笹竹のそよぎを藍に染て　蕉
稲陽乃雲に菊を恵　角
一代姫里の庄家に雞見れ　蕉
新文字に書やと云歌を貴る　角
ほころなき恋の雫を嘶らす　蕉
うき世に沈む宮倉の痩　角
當ハ婆々貧童し空六八僧人儀　蕉
やよを浅何かし此嬉下タ見ぬ　角
斎ひする佛偕犬もくはずや　蕉
纜々そよく庵の秋蒔ぬ月　角

章への迎つく脩まちつさぬき　角
あくびやんて蓄ふし尽し　芭
ゆかりし黄金繕ル小袋　角
黒鯛くさしおとし女ヶ乱　芭
枯藻髪栄螺の角をまそけん　角
魔神を使ふと荒法の峰　芭
誘られ猿き世すり加よ　角
婦ハ懐に妊（ヤドル）るあり清く　芭
山寒く四睡の床をふく嵐　角
うつゝに消く樒乃灯　芭
ゆる日店朝をねさえ月と見　角
西風をあやまく白むおやみなく　、
哀いかに文体ぽてり吟潤ん　芭
みちのく代考もらぬ石臼　角
武士乃鐙の丸扇まもる手　芭
八幡の駒乃雪代吉ひく　角
詩あきんど年を貪ル酒債哉　、
冬湖日暮て駕る馬鯉　芭

お手暑

花にうき世我酒白く食黒し　きん応
蛛ど空を陽炎を杖履　一晶
車鳴て青鷺友を悔るらん　嵐雪
妻子礫をうけし角、寿　キ角
身を浮と汗の袂を芦刈く　嵐蘭
冴のさし行は〳〵を鉤新　筆
琵琶洗ふ雨乎し鉤の時なはし　晶
朝に忘れしをかるふ紙衣　芭
浪人の意地ある哉諸（ナツリ）おぼしめす　雪
屋ぬ乃一夜に入ひそかなる　蘭
崩さて同し家宕を妬ひける　角
萬えて退之か行寛を奪ふ　員
霞香代を酬猪の角を嗅すん　芭
汲てる海ありて雛（ニユモ）乃紅　雪
傾城の膝を撞し紳代ぞ　員
細おくりに角をかくそ内海椎　角
化しの椿をおくそ葉の月　蘭
破蕉語ッテ詩のよを次　雪

朝鮮に西瓜を睡ら遊けり　道
つくしもしらぬ日乃松浦汀撥　晶
影つしろあけやくの萱庵　雪
雲ち松乃盤琵の管　菓
帰へしめ新ハ六十の翁すて　角
御所は於ゆかく世をと申之　道
人の懐剣穂長の青代厨子悪く　晶
松田んびうきき雪の暖　雪
きされしや陳中に似を斬らく　角
山野に仙く侮と含うよ　菓
盗々丹の身に伯夷の足あふふ　蕉
とくさハ武士の憤草　角
たゝるし武勇争を屈く無念掩　菓
笑ひさんやそし悔ろ鬼　晶
蛙の康を母さよ白まさかく　雪
つひに餐会ありしけしたう　蕉
菜に栖廬山の列をなるらん　角
栖にまとゆく瀑布に酒呑　菓

納涼の折々いひ捨たる和漢
月の前にしてみたしむ　芭蕉

破風口に日影やよはる夕涼　芭蕉
煮ル茶ヲ蠅避レ烟ヲ　素堂
合歓醒ス馬上ニ　、
かさなる小田乃水落る　蕉
月代見ルニ金氣ヲ　堂
露繁サ添フ玉涎ヲ　、
佗加ゝ年なろる碑の中　蕉
憧とききよける村作　、
挈テ帚ヲ驅ル偸鼠ヲ　堂
旧あゑ吉に訪ふ御魂座　蕉
くろうしぬそかなしる柘の櫛　、
乳をとの覚子に何をと乞ル　、
舟ハ鉤ル風早浦　堂
鐘ハ絶ッ日高川　、
熱くうす苗の泥もあさ小庄　蕉
食ハすけぬ奴を出の新　、
詫教ニ三社ヲ本ナ　堂
韻ハ使ニ五車墳　、

花月丈山閑し
篠を杖つく老ぞうらやむ
寅銀鮎一寸
甚面の滝やゑを競ふ節
朝日新頭の袖とうらやまし
鳳喰喉早乾
よゝけつる柔の襟ふあつて秋さそ
内も火と湯も庭の夕月
霧籬顏蹙眉
霰浦目潛哥
ふとんまくらを枕に伊豆香の夢
いすれぬ錦乃散珠と飛光
山伏山平地
門番門小天
鶺鴒窺水鉢
まねよそるそく啼る雲やさ
勇深く初潮の露其まゝ苔をさそて
臨谷伴蛙仙

堂 蕉 堂 蕉 、 、 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 、 堂 蕉 堂 蕉

枚風
桃青 、 風 、 名十三

時節さそ伊賀の山畑花の香
身ハこゝと二尓きむ武蔵野
庵寞の古き新綠よ葉末そ
うゝやかしやゝ今うき波
露白線をはゝ蕉翁の月をし
たゞこゝに續いへ八つか七つ死
麻蒼変例の庵よ髪ぞえて
时々の湯とゝの月としきれ
活雲の清く家ぞ眼きねぶ
親仁も来の山下風の
古人の松もさひこる境枕
米を代澤く河面降り行く
探虫ら篁の雲よ嵐れ月
涼りし瀬ぞ初アの夢
伏見翳あまれハ秋の風
かこひとそふよ杭の露
一生ハあて元の脚き家出
世をうきあまかゝりして在

ちりぬきに郭の辰巳山見えて
姫の市とぞしきりまちかな
髙髪に立名と色縮の劫
涼とむかしに縞笠の紐
恋しらぬ公の守を恨ける
小川さへ色ふきの志ら露
又猶つゝく香山法師
いさごを踏立尾で小鞍
藤とほのけく秋深き月よ旅衣
三里斗の道朝霧
追剥よ押もあかねは後霧
うけて流いさたカ風の茅
舟宮の杉よかゝ無起きて
雨やそらちやとそあてける
清おる手稲の幕の名計
火縄のちゝの一二寸往
仲ゐらう緑挿る花の流
江戸もまた上野の墨の番

貞享四年

時は秋吉野をこめし旅のつと　露沾
雁とも袮り風雲の月　芭蕉
山陰に刈田の白にふきさひて　沾蓬
武者追後し小川の水　其角
若かゝる流かさきに横まき　露荷
とろきぬ宮に枝詠く松　沾荷
傘の雨とさくかしこまりて　蕉
系むろし神山氏　沾
暑き日乃汗と争む猿の多　セン力
挽し尺のよこかゝる　蒙
川音にあものむらし法も助く　角
髪ある僧に禮つゝをゆる　另
真白とり猿く山の奥深し　沾
さはる魚れもと白み風景　蒙
月清く白雨咲みに蘭の燥　蓬
尋ると流の中に乱てしうる　角
色嗅くしてまめるその菴　另
額板ちに山吹の梢　七二力

信濃路やあちらの渡の花咲て　治
磐手ふさけ香隠る石　法
楯乃紫中ま家文章を出結了　蓋
鶯了し許を　まあのさくつを　口力
お陰ハ盈ひ空ちて月清く　セニカ
琴をと問ちら夜のあきら風　蓋
勢ちらく壁後をえとる秋の露　男
九輪ゆひさん尾上ちるけき　治
風の声なしふ蘇鉄のやあく　蓋
大口なてる庭の竜掃　蓋
姿でなく橋の離立て床寝　治
能とう雁を偏てらた流乃　セニカ
一袖乃粉らんの連家勝ま盃　口力
名を恥ぬつき紙のそらひ　治
西らんく読ま命ま男つき　蓋
ゆたし娘の浮き梢子の参　セニカ
襁褓笆の緒乃をさわく　蓋
柳の水乃あしくる葵　桃葉

貞享四年十二月廿四日御修復
あつし熱田社にまうでて　桃青
磨なほす鏡も清し雪の花　桃青
石敷庭のさゆるあかつき　相
時しハ松笠落る風やさくく　桐葉
あゝちとくる山のまあらひ　桐
秋暮く月影き園のひとつ家　、
つえまわしらくきひのつし　桐
肌寒く身もをぬ神を襟まかけ　葉
こぼれし螢乃果ま浮刀　桐
明ける読経歌ハ去しくと　葉
や山れし虫乃境ちり庵　桐
右畑まひらきてる麦刈て　葉
お咋ふ姿や聲るうらん　青
松咋よめし荷ひ打秋の風　桐
家をとりの鳥衣の月　青
結中等乃花そゆかねする　桐
温泉ハみえく金をすきめと　葉
女塚の廿八歳乃冬ま折しれ　桐
義り涙色を啼る法しし　葉

朝霧にくまれて儒縫子の影　去
ゆしくる坂乃京かけ　紫
ふ隔る一里乃河原打ひて　青
あし小流む軒の桜凉　紫
初雪いく度とけて記なさり　青
勅定とまとふ身すそ高名　紫
鮮る陽く僅よむ唐を送りと　青
塩被去岩乃煙毛取れ　紫
行ゆかむ松すも飛ける茶とて　去
縣乃舞の走るる月　紫
秋山の伏猪を告る靜めくに　青
足ひときちと刈かる萱　紫
優婆塞か法眷勤る文傳て　去
旅人新を趣そ的よる　、
莢菜よぬき茶い雲雨の客　紫
手桶の衣る婦生そかる　、
西門乃を染よきらふむ帳て　去
蕓の袂よ敲うつなり　紫

冬景や人きかぬ市の杭　渭子
くれうと走入れ乃雲　其角
年の貢たいく貢ひ縮りて　芭蕉
次と楚舟の星くうきさえ　仙化
鶯るうく松おりしろき残の月　枳風
揶りとうんすれ一むら　コ斎
太刀持てる達のあれて寄しれ　化
車のきれよ流む綾むし　子
歸来る友乃地蔵草くちく　角
嫁しや飯よいちさひろん　風
くし續枕よ添てのうしき　化
沸分合昨日むてちきら家杖　角
賀茂川の緑を胸乃大よほさん　斎
萩ちうう承市原のほよ　斎
賂の庵うる杖つく夕まれ　文鱗
牛を彩ちれ月のそそさぬ　子
花の日と笞八乃ともかつうれ　李下
桃うり成う一玉の碑　風

私庭賢者となりに私又えて　蕪
何の海を給へり濱をもし　角
松しぐれや言花の庵に活をのこ　下
んで猶寸いくらせ見ぬひ　鈥
日の時久しいかれのさらしと　リン
是佐ひらけ納豆き家松を　蕪
行里の座のむすこ角入て　子
伊勢おもひつる輩草笠　鈥
更深なるや拾ふ子は袖よい日　化
祝ひきるに破る切簾打つ年　下
月入て橋ゆき孫蒲すこく　子
あらしれ労と長ふやさま　蕪
塚の下母乞かなん秋の風　角
邦と軍ありくまゆくる　鈥
それの松くるふつきよ結ひて　化
すり餅をゆるん月に営　下

あらしには花かさりよ稲架山　房梧
よそれ家残く言は名くなる　芭蕉
賑の届る里の垣根よ餅と云ふて　荷兮
黍の穂あふ穂ほそさなきさ　越人
あり明の夜半八人のかきもほし　羽笠
みなかしそし秋の入らは香　舟泉
住居するあるうえさよぶりのらん　野水
荻よなをありて竹疲し村　杜
彼衣とる良つ色にくれとろへて　蕉
あれ髪剃よまるらさはし　兮
積りして金子おんきつかしく　人
打架をみるよ薪伐やま　笠
雨ありの烟霧はあられなり　泉
硯もなくてみる秋の景　水
糸まきまくかきはらは月の下　杜
まろ国のさかね眉はち流くし　人
思ひくし積つき堂のきはらて　水
追ひゆく嫁の言く歩なり　泉

郷　足　集

青しやうらねえのも闇まて　笠
砕てまゐに此橋乃らく　蕉
夕ぐれハ唄をもうたね菫池て　兮
打水もしめさまれ笠とも　水
追ゆる木陰の馬乃かくられ　蕉
峯ふちきりし芥れろし流　桂
ねうけきハ給をきさして森入り　人
女師きれ月とちらるかう　兮
冬の日乃きぬるま油おくしな　水
栄焼盛か見れてほろし　笠
砂原の川乃あちうれ気ありて　泉
枝ずし牛とハ拾に給ゆく　水

貞享四年

星崎乃闇を見よとや啼千鳥　芭蕉
船調ふる蜑乃埋火　安信
築山乃まへに梅を植ならべ　自笑
揃ふ子猫乃あまよ逢なく　知足
鶯乃夢さそと詠月のかの之　業言
君のあまさ乃壁辺まち風　如風
一里代せ母有の旅し川上に　重辰
祠さゝめく門にもむし家　言
市へおろしたる野しむと師走なれ　足
年に後えて窓さくつまそして　信
寂臼乃吉野なりし我は旅　風
身をほし行る蝶貝の酒　蕉
宮細ま申とうきし秋のを　笑
深ま神きる宇治乃橋も　風
菴作る西行笠のあちぬらく　足
啄木鳥の多くし松の古枝　信
いくさま茶会時とつくらう　辰
やつ此家あもとすし八流きて　足

辛螺ふく此伊予のきて蓼か水　風
角ある眉ハ化粧ちる秋　吴
浴霄乃みを嗜さし帳の内　言
帰しれぬ夢に枕あつかひ　風
飛なりて死再まうひ悪人　信
鹿子に中つましく象のつえ者　是
弐日此日ニかさ家をしをく　風
沙そさ茶此おぬ川口　辰
様千に顕すふる冬ちみ　蒿
篁揃ある月影火乃影　笑
初月に不里乃風の竹裏ひ　足
鶯に嵌綾く　蘭独歩く　直
鉛霄につるさハ鳩の備南浪　辰
あるり経庵なめかみよる　笑
此人乃着宰をあさ為さう　言
鴬亀いく仏の惠ぬ流　風
田もと逆でおちに山の名を空　信
嚢乃ゆれ種とゆきの秋　竿

於手習

狂句こからしの身ハ竹斎に似たる哉　芭蕉
たそやとはしるかさの山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
かしらの露をふるふあかむま　重五
朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜国
日のちりちりに野に米を刈　正平
わかいほハ鷺にやとかすあたりにて　水
髪はやすまをしのふ身のほと　蕉
いつはりのつらしと乳をしほりすて　五
きえぬそとはにすこすことなく　兮
影法のあかつきさむく火を焼て　蕉
あるしハひんにたえし虚家　杜
田中なるこまんか柳落るころ　兮
霧にふね引人ハちんはか　水
たそかれを横になかむる月ほそし　国
となりさかしき町に下り居る　五
二の尼に近衛の花のさかりきく　水
蝶ハむくらにとはかり鼻かむ　蕉

来夜よ簾透顔おぼろなる　五
いまぞ恨の矢をはなつ声　兮
ぬす人の記念の松の吹おれて　蕉
しばし宗祇の名を付し水　国
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　兮
冬がれわけてひとり唐苣　水
しらじらと砕けしは人の骨か何　国
烏賊はゑびすの国のうらかた　五
あはれさの謎にもとけし郭公　水
秋水一斗もりつくす夜ぞ　蕉
日東の李白が坊に月を見て　五
巾に木槿をはさむ琵琶打　兮
牛の跡とぶらふ草の夕ぐれに　蕉
箕に鮗の魚をいたゞき　国
わがいのりあけがたの星孕むべく　兮
けふはいもとのまゆかきにゆき　水
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　国
廊下は藤のかげつたふ也　五

霜月や鸛の彳々ならびゐて　荷兮
冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
樫檜山家の体を木の葉降　重五
ひきずるうしの塩こぼれつゝ　杜国
音もなき具足に月のうすうすと　羽笠
酌とる童蘭切にいで　野水
秋のころ旅の御連歌いとかりに　蕉
漸くはれて富士みゆる寺　兮
寂として椿の花の落る音　国
茶に糸遊をそむる風の香　五
雉追に烏帽子の女五三十　水
庭に木曽作る恋の薄衣　笠
夏深く山橋にたちて見し人　兮
麻かりといふ歌の集あむ　蕉
江を近く独楽庵と世を捨て　五
我月出よ身はおぼろなる　国
たひ衣笛に落花を打拂　笠
篭輿ゆるす木戸の山あひ　水

骨を見て坐に泪ぐみうちかへり　蕉
乞食の簑をもらふしのゝめ　兮
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　国
御幸に進む水のみくすり　平
ことにてる年の小角豆の花もろし　水
萱屋まばらに炭團つく臼　笠
芥子あまの小坊交りに打むれて　兮
おるゝはすのみたてる蓮の実　蕉
しづかさに飯臺のぞく月の前　五
露をくきつね風やかなしき　国
釣柿に屋根ふかれたる片庇　笠
豆腐つくりて母の喪に入　水
元政の草の袂も破ぬべし　蕉
伏見木幡の鐘はなをうつ　兮
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　国
春はしらすの雪をききとよ　五
おもと夜の代をつくまゝ　水
山茶花匂ふ笠のこがらし　笠

重五
炭賣のをのがつまこそ黒からめ
ひとの粧ひを鏡磨く寒　荷兮
花棘馬骨の霜に咲かへり　杜国
鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振する　羽笠
賀茂川や胡磨千代祭り微近き　兮
いはくらの聟なつかしのころ　五
おもふこと布搗哥にわらはれて　水
うきははたちを越る三平(サンペイ)　国
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　笠
火をかぬ火燵なき人を見む　蕉
門守の翁に紙子かりて寝る　五
血刀かくす月の暗きに　兮
霧下りて本郷の鐘七つきく　国
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　水
はなに泣桜の黴とすてにける　蕉
僧ものいはず款冬を呑　笠

白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　兮
宣旨かしこく釵を鋳る　五
八十年を三つ見る童母もちて　水
なかだちそむる七夕のつま　閑
西南に桂のはなのつぼむとき　笠
蘭のあぶらに卜木うつ音　蕉
賤の家に賢なる女見てかへる　五
釣瓶に粟をあらふ日のくれ　兮
皷手向る弁慶の宮　国
はやり来て撫子かざる正月に　水
寅の日の旦を鍛冶の急起て　蕉
雲かうばしき南京の地　笠
いがきして誰ともしらぬ人の像　兮
泥にこゝろのきよき芹の根　五
粥すゝる暁寒くかしこまり　国
狩衣の下に鎧ふ春風　蕉
北のかたなくなく簾おしやりて　笠
ねられぬ夢を責るむら雨　兮

日　ノ　壱

つゝみかねて月とりおとす霽かな　杜国
こほりふみ行水のいなづま　重五
歯朶の葉を初狩人の矢に負て　野水
北の御門をおしあけのはる　芭蕉
馬糞掻あふぎに風の打かすみ　荷兮
茶の湯者おしむ野べの蒲公英　正平
らうたげに物よむ娘かしづきて　五
燈籠ふたつになさけくらぶる　国
つゆ萩のすまふ力を撰ばれず　蕉
蕎麦さへ青し滋賀楽の坊　水
朝月夜双六うちの旅ねして　国
紅花買みちにほとゝぎすきく　兮
しのぶまのわざとて雛を作り居る　水
命婦の君より米なんどこす　五
まがきまで津浪の水にくづれ行　兮
仏喰たる魚解きけり　蕉
縣ふるはな見次郎と仰がれて　五
五形菫の畠六反　国

うれしくは嘯る雲を麓ちらして
其豆代る乃祥つきかへて
とをきまて秀剣の橋はなれはなかり
庄屋乃芽川をよみて送りぬ
捨し子は柴刈長にのひつらん
晦日をさむく刀賣る年
雪の狂呉の國の笠めつらしき
襟に高雄か片袖をとく
あた人と樽を棺に呑さん
芥子のひとへに名をとられけり
三ケ月の東は暗く鐘の声
秋湖かすかに琴かへす者
烹る事をゆるしてはせを放ける
声よき念仏藪をへたつる
かけうすき行燈けしに起侘て
おもひかねつも腰の帯引
出るかなよしの花のかけまて
千代世の自讃をかたりつく

はつ雪　　　　野水

はつ雪のことしも袴きてかへる　　野水
霜にまた見る蕣の食　　杜國
野菊まて尋ぬる蝶の羽おれて　　芭蕉
うつらふけれとくるまひきいる　　荷兮
麻呂か月袖に鞨鼓をならすらん　　重五
桃花をたをる貞徳の富　　正平
雨こゆる浅香の田螺ほりうへて
奥のきさらきを只なきになく
床ふけて語れはいとこなる男
縁さまたけ乃恨のこりし
口をしと瘤をちきる力なき
明日はかたきに首おくりせん
小三太に盃とらせひとつうたひ
月は遅かれ牡丹ぬす人
縄あみのかゝりハ夜明の空薫
出川くしとはし地蔵切町
初花の世とや嫁のいかめしく
かふろいくつの春そあはゆき

柳茶に餘生ゆる袖や衣のなる　兮
うらひもを親ゆる家婿と申す　蕉
篠ふかく梢ハ柿の帯さがし　あ
三絃からん不破の関人　土
乃すらうと浮ゑく材薪を忘れん　蕉
緒まかへし　のさても　七十　ム
奉加めんに堂に金から乃なひ　土
ひとり川の傘は下等まさぬ　兮
蓮池に鷺の子遊ぶ夕月夜　ム
おとよ手つかふ蓆根とも哉　あ
月よ寺そ風唐輪の髪結て　兮
ゑもぬきぬさ　臨済をまつ川　蕉
秋蝶の虚に巻きく芦のさハ　あ
萩此實つらふ雫る川ちる　不
状より硯をひらき山ゟあふ　蕉
飽ぬうハ衛侍の房ゟ侍ら　ム
三千代花鶯鶺尾長の鳥いくき　土
しらふかき　つきむ鐵乃福治州　兮

ゆは寺嶋氏よ見えし西行の
旅草のわり手作りしと和寸

京まではまだなかぞらや雪の雲　芭蕉
千鳥しばらく此海の月　業言
小蛤小兒とあまが袖ぬれて　知足
酒まそもさむきハ尋の風　如風
川捺し琵琶乃袋を打拂　安信
僕とおく行く牛いそくし　自笑
宇川三ッ夜啼の雉鳴ほと　重辰
明日乃命此飯を分る　信
ひろふ薪を晴月よ山そゆく　笑
読つく所ゟひりし花　蕉
そのまゝに別の後さ一こひ　足
なまさも添て翻の播杉　言
髪ゟ川の熊乃沖の岸もつらく　蕉
身の痩出く秋ハ痩苦し　風
釣簾の前またそことも月のあ　信
楊枝すゝみ此ちうしあるひ　足
小袖しく茶の湯をはやし　辰
この秋猫の子を捨て切　言

うさ年をとれてはすゝき衛もぬ　足
父乃いくさを語ふしの夢　蕉
松たけをとこし艸ある陰の夢　笑
翅をぬらす鷭も乏しかりし　言
静なる亀を釣日をくらしなれて　信
三度ほしける執此ぬけ　矢
山寺の車に乗る花を荷ひ　蕉
樋取しらく宮をうらゝく　足
瀧津瀬にけ清の秋の風　風
猟らくる萱此手を乱し　笑
扇やれく月いむかし此執なり　言
老を変らぬかこ颯を見る聲　蕉
手に出て見し情の蝶乃声なける　辰
陣乃夜座に基を作る短　信
山吹さりよこきる雨の降　風
宰をとてよけるん杜宇啼け　足
急堅みを集る嵐無事　言
沛然かる神垣乃梅　年

尾張国熱田にまかりける比人々伊勢の海見んと舟さしけるに　芭蕉
海くれて鴨の聲ほのかに白し
串に鯨をあふる盃　腸　桐葉
二百年吾此山に斧とりて　東藤
樫乃種まく秋を暮らう　工山
入月は鶏乃鳴かけたるそ　葉
かるかる国此旁扉の中く　蕉
降雨に光る母の湊を望　山
一輪咲し苗葉此窓　藤
苔此上に二日留る国を明て　蕉
固り悔ると猟呼ぬなり　葉
見芝ほる河原遥かに舊鶉　藤
花表たけたる家松乃入口　山
篁籬をこゑのや室綴ぬ翁　葉
秋のうにぬ乃人倉より　蕉
をとりひの塗み此濱り月洗て　山
霧此しつくは露を出続く　藤
法器ゐるの扉を押ひらき　葉
夏人乃形添むるけ消よ　山

蝦夷乃聲なき蝶と身を觀て　蕉
生海鼠干瀬ハ袖ハぬらしけり　叔
木曾より西ハ御堂むかく　山
蕎麦にくらきやの十夜うちの田　蕉
ほろくと蛇螺ほらひそう　荷
家はなし　癒の咒咀　紫
不二乃根と笠着て下に雲のかう　叔
騰てり鶴乃ひとつ飛らしむ　山
御笑に鏡をとりのひ為懸ひ　紫
夜乃深く小性萩の戸を揮　荷
月雨く外乃写ハ心もて　蕉
槍をき急く消くさ乃霧　山
被を着る身をまかせる　荷
言藤の蹴り鳥俄なし　紫
紅葉乃庵盛に茶の事を徒　蕉
ちいさき家も代そは目の伽　山
春雨乃翁彫のかはくなき　紫
青草ちりは花の撮折　荷

貞享五年春

何の木の花とはしらず匂哉　ばせを
蝶に鈴鹿を含むうゐひす　益光
春源の茶の烟は香揮て　又玄
二葉のすゝき去年の穂りり　平庵
有明乃鼻紙とさめぬ川つら　濤延
冷さ是ハならぬ秋の油火　道里
駒捕に嵐の馬子が声出して　光
門はそめなる田の中代る　芭
山路来て清水掬する袖の汗　庵
わつらふ臭をしむ熱つき　玄
母のたま古き館乃破れ　芭
茶をもちつきて洞ある　延
いねさまに酒をあまも知らはひの人　光
陣乃後屋に俤のこりて　里
白雲の峰を広く敷つし　庵
そしらぬ顔に稲る虫の初稲　玄
残り月と嫌き笈のむかしく　芭
霧に流く積りくもし　芭

神仙にやとはれ来ぬる庭連の内　先
返事に法ゝする　きぬ代御　人
忘れたき池のあやめをかし葉て　迻
水鶏を追て起し　あらつき　雲
たゝこ吸舞のあとの煙とる　庵
あらけりもの　に霜くる也　里
けふこうる　業乃一手をゆるされて　萩
鞠乃主子は浦八さしそり　光
夜きくに主まにある秋の蝶　雲
ちくらし風に能香ゆらぬる　迻
笈ふけて驕あの月をとる　人
あらしとすさむ家のきぬきなき　苗
親ひとり葉に離れと　おつる　光
中川秋氏をあに代なれ　道
世話を保とまれいやとて　承
ゆふとこむ掉に紅葉なり　玄
その暖乃ら法にあをとれ提め　迻
短冊は上祢埋乃央　人
やすみらしえにまつて笑を　正
ちそ紋

貞享五戊辰年七月廿日
於竹葉軒長虹興行
雲霧に暫くもおれぬ葉の庵　ちそ紋
藪乃中より見ゆる青柳　長虹
秋の夜は虫のね稼ぎに驚けて　蕉笠
月なき　姫とも酒の山あひ　一井
主なるしと人のやハひする法に　鉄人
薬掛宮く　色振篤なり　胡及
末は蓑不敵る桜の木を神無月　嵐深
つて稀ら疾家鴫乃くらとも　蕉
延気く蜘の巣糸のなき　虹
ワれは独ノや喜々ちもろへ　笠
丹涼き兵立ち髪の液しく　井
殊ゝ月もなく戸つるなり　人
石籠も落し山之秋の月　及
甚を泣くて暮ぬけとし　深
出かむし海るとのこハ河表そ　道
白あらぬめのそんめる喪うき　笠
西そにきへく色のうほひて　井
竹ゆひうける新の達翰　虹

のとゝまきすゞ八宮あひのかし能く 兮
本馬出しきて手も無案ふり 及
冬恩を下記つまちそかしあり 弾
切竃打掛すこき夕暮 井
さみしく乃男をそうする肉の新 人
人一代の恋をとよ飛 荃
捨し世も篤は膳もうむしき 虹
打ち粥く苗もと麩もあしくは 人
情ちりつきさし色く文かす 及
下戸とみくゐる雪の夜は寝 兮
花咲乃妻と訪ちのたよふその 荃
嫁をとめむ花め眉かて路 弾
去のひ志よすくさむに汲垣の奥 及
娘ことや云ふれ松のとをし火 人
明あき駈とおもへの服なく 兮
るふゝと呼ぶ本そを遊ふ 荃
花よまれすりは薫そおもひ 弾
蕭たらもほそる乃みふる 虹

桐葉
つくゝと榎の花の袖にちる
ひとり茶を摘藪のひとつ家 芭蕉
日数山雉子の雛をとれ之来て 叩端
清水をすくふる柄杓に月 黄口
松かろき鮓売る子の上 東藤
花せゝや節に扇子をとほる 工山
あま紙に郭公を書付て 蕉
蕎る大津に三井の鐘きく 端
雪をまつ湊の焼る袖とるよ 山
麻よりの鴨の尻皮の羽ら 葉
杉風の客に酒を飲つくし 口
佛と刻む西若の信 藤
鳥ねむの繋ぎ添女夏に来て 端
恵をと見破る気色の月 直
牀は枕て味お答ひ分 葉
丘子の本ま乞へきつれ所 山
彼ぎする鐘の音にまれうゑて 藤
陰千寸旅銘のかつら塩子石 端

堂おりてあかりさるか庭男　蕉
又きつ塔のほとりの夕ぐれ　桂楫
鶯の籠の尾を拙の囲にかけさせて　擔
風ありて式だたく今への弁死　犂
葉ちりて朴の落葉を引抜め　山
田舎祭りに物見せしらは　蘇
打よりて寄られの書をとりつく　口
たはれて君を帰りまより　蕉
須の鉢すり鯨勝うせく　犂
おほん帰り京の時を吉ぬ　山
韃靼の東乃寺の月凄く　蘇
桔子の栗の行をまよくれて　擔
嫁帰てまつ崇椿の秋乃花　蕉
葉を張かゝるの尾の琴　山
あられきる今宵歌て帰る哉　蘇
入日の紅乃星ぬるとつ　犂
まとるの使さけつとむのおく　蕉
流しの衾ろうろ西行　楫

深川の夜

雁がねもしづかに聞ばからびずや　越人
酒しひならふこの比の月　芭蕉
藤ばかま誰窮屈にめでつらん　〃
理をはなれたる秋の夕暮　人
瓢箪の大さ五石ばかりなり　〃
風にふかれて帰る市人　蕉
何事も長安は是名利の地　〃
医のおほきこそ目ぐるはしけれ　人
いそがしと師走の空に立出て　蕉
ひとり世話やく寺の跡とり　人
此里に古き玄蕃の名をつたへ　蕉
足駄はかせぬ雨のあけぼの　人
きぬぎぬやあまりかぼそくあてやかに　蕉
かぜひきたまふ声のうつくし　人
手もつかず昼の御膳もすべりきぬ　蕉
物いそくさき舟路なりけり　人
月と花比良の高ねを北にして　蕉
雲雀さへづるころの肌ぬぎ　人

破れ戸乃釘うち付る夷の来　人
只世をさびし紙子挽けり　蒐
家賣て後緒をつなむ寸鏡　人
そのあたり居る鄰子の物いひ　蒐
金もくはさぬ望の匂ひかな　人
御廟に詣る堂は汀隅　蒐
本やらぬ嵐の雨で痛中に　人
猶穂乃さかり露ハこぼれまで　蒐
あやまりに鮎み妹か夕すゞめ　人
月の雲ハたゞあはさつむぎそ　蒐
月のうへの雲まで消さるゝ　人
頂をたて縁ハ錦のいろ　蒐
秋の田を刈とめ家の長月　人
さゝくなかりし夕の宮詣　蒐
いろめきし尾花の木茶屋　人
説をきる子は鹿くら髪　蒐
花の比佗銭集まりてやまず　人
四五人脚さへて膣さくら　蒐

一　初秋や海も青田の一みとり
初秋ハ海やら田やらみとりかな　芭蕉
舟ゆくるの口とむる月　重辰
わら庭青ほのくらく薬を砕て　知足
やせし欲萩の竹まもりかう　如風
給のかゝりを取ぬる砂子　安宜
笠かうけて飯まねく客　自笑
夕立の降つてしまふ雨の跡　風
田つまむれし繕ろの稲とのれ　足
浪氣なひてあつゝつの柏やなかん　風
枯もひ鉢せる老乃赤らん　笑
琵琶澤でおもひハ活て咲すへき　蒋
詩篇のひらくも秘る恋髪　直
新るさ夜の鬼乃かけさし　辰
施餓鬼ると済入れの幡　蒋
洪瀬川むかつま角力ぬ秋て　風
橋かゝりほとさ月を砂らり　直
むの音寝ま見せられ沢りぬ　足
水おもしろき寺れ暮らせ　牛歩

瀬田の橋まハ霞こえつゝ　宜
白髪多く炭を売る市　是
芝居から此紙書挿ふ布衣　笑
常ハ一七日戸帳ひらきて　是
かゝ堂百そのあたと続とり　升
春まうちむ又八乃曲　宜
酒ある秋にハ伽羅を焼けり　是
むしはらうしるの作垣　当
恋のころ此ごとまうしる関の跡　笑
魚得むすめの岸によ月　辰
秀の才の暁乃を会と三宝呆　升
彼米かり金き明けれの花　是
猿の子乃秋なつかしくはすみん　宜
うれも絵も紫の戸の伽　升
衣すてゝかゝ下りかる峠の石　凡
杉葉まいらせはらくしつかむ　是
かんさしにさも娘らも恩く　宜
おそそとけや法諸亀乃舞　笑

たゝみけて書入はゆかる扇子哉　芭蕉
涼しさ去りひろはれぬなり　昌碧
松風に秋つかむ日向のすくなくて　兎桐
鶴にあるれ松りておもしろ　芹竹
あ深く赤おちすほとの秋の花　桂水
京う山の端に月のひとむろ　駐雲
きぬしや烏帽子宝不忘れ給　越人
眉ほそむるて恥るうれぬ　舟泉
寄子おもつくとあけは常まて　筝
ほし飯の水の清かれもよし　桐
きて来る節子若まなる宮の岸　翠
洞にうつして鉢て松にえ来　水
門前の鳥つ入る人ハなりまり　竹
筏に南を添うるのの花つ下　蓋
よれにはよね まうう後のきわ雪　香
松ぬるなりゝ添つうれ月　人
うかしと枯葉に世のまぬれつる　永
峰よもしらて釣るうきれす　桐

尼寺の夜る暁くきこしかる　碧
汐アなかれハ水のとたえかく　壱
見ゆかけり新まとを付久しける　人
布枝二本ねハさらし身　兮
隊られし妹とあつかふ人もなす　真
会栞手をかひて法ぎを　碧
幾重のんでむされぬなきや　泉
本一髪剃ま鴨川の水　水
塚のちゃま昔の夜も才まはれ　桐
扨そさかひきのまくらつけま　人
月志の一丈橋と消てすくう入　兮
そのさえて見くと打くれ杖らせ　真
此橋とねうて四る雪吹井　泉
山ひき出して年つ初る鶏　壱
者てかけて下役治上弓太夕　桐
やうこてむま成ら加花の陰　水
穀の中まで核やまゝゝき　芋

まさな父

何とハなしに何やら床し菫艸
編笠しきて蛙聴居る　叩端
田螺わる賤が喜のあてしなみ　桐葉
公家に宿かす竹の中宿　蕉
月晴る雪の夜相乃張出けく　蕉
酒飲む姨のいふ淋しき　茶
双六乃うらこと文よむ出し　蕉
既に帆かけしも袖の棧手　端
髪わり侍従ら嫉おとろへて　葉
野て夏のおし岐阜まぬ翁　蕉
虚樽に色なる艸をかけ添　端
蘂君をとも家名月は寐　葉
西ゐの接女の秋は夜寒さや　蕉
烟風と吉けみ麦粉ちら　端
川漱行堅を角に張りけく　葉
金利とる滝に鶏日く川る上　蕉
霰る石の法座乃去久し　端
初織なり酒を賀る樓屋　茶

あまみく女は聲わるきなり　蕉
枕屛風の画はあみくるを　路
関なきし笛の此鉢えの右さうり　荻
三ツ股乃舟深川の夜　蕉
菴に住やひとり杜律を味ひて　路
花盛なる作こきの蕎麦　荻
以ては喝百舌鳥八吟ると夜あかり　路
手ら波世小僧ゆひやふ　蕉
月ゆく折枝山をつゝらん　荻
雲らも夜盗の詣埋むなり　路
むし雨のそ筆拝する茶会　蕉
飛よ川気の仇陰ふ嵩　荻
道こめる人に落はさらに　路
男居も銘乃老その転しな　蕉
風そつき大竹のあれ七夕　荻
けつきあく生雛の菱　蕉
出て碧山出て聖ぞ成る萎咲て　路
震あり隣る連歌師の松　荻

元禄六くれ應六月

大津、彦、香、奥州

蕣乃経師脚ら足引の那　芭蕉
七夕く涼しき蔦此萋　李香
初月の新芒繋はなひて　尚白
石まいとしの夢気しくし　角尖
松の本と秋風後ゆ打くは　通雪
結とや名くまて此系まに　松旧
うかれる世は副く日を積る　香
失敗は鏡のよるる悪くき　蕉
古塚は古ける乃みを捨はる　尖
標乃ゆるうと家書かし液し　青
やすさ苦めかさり易く営かり　宣孝
浮世乃那の陰の蒲寺　白
おかし咲雲男と分る月ニツ　旧
枝とまきをは笈笠此雪　江山
稲妻かり時く社浄ゆれく　蕉
よこし田此方のかくハ法らく　尖
ぬとりかくしものハ咲わや　系
夏り絶る年此材　白

麦食に嘗据く友有し 雪
されける宮の鐘の音せず 山
ともし火のかげよする松の枝 考
出るときそふ舟のむしろ 宮に
尾心乃とめて照らしき野辺の蘂 竜
進ハ行く虎の子を梳て 蓑
中の秋荒海ある牛を切出す 雪
三位ちらく菰を置れ 香
うきん餐を繋くハ見る月の影 白
大勢家くあそび見る月の女 秀
一条や二条の小袖売 内
枕する昔これ比叡の山風 江
とろくと雲まかせ行く衛帯 雪
番をなめくろうふあそをし 香
碑附ハ伯父の動き人見送りし 訪
初乃妹る子をとうとこまもる 蓑
機うくむ妻の本の春を焚て 心
くさき多ゝ海を年の初来

京汾の舎撤寡桃亭にと 氷
多つ将く 魚
徒ある人と枝折の夜明けれ 寡桃
まさき霞奈こと深き推の紫 魚良
樹の布乃仮屋を吹とりて 魚
町中桜ゆく川竜此月 桃
竜乃の子 笠翁とまとまする人を落りしえすむ 良
嵐の夜きと 秋の茶画乃ちりめんハかくさそ 魚
かくさいはなりハ嶋そ 道
物以そあの茶に魚と押入るかくさ 江
寐さろき髪乃法しき茶合 縁
緑とろふ火を焚する家されし 桃
盗人とこまき廿六乃まちと 道
松乃根に筏をなしてまとめ 桃
豊うき多く連歌をしめる 輪
名ところの赤うしき小臂て屋儀 良
拾うき彩尼うちの家 桃
あの月と無ゆくてそ照られ 道
歳ととそえめ倉の吟きまふ
諸備の時めく窓のみくみし 良

おのゝ羽に雪の蝶乃小車（イ二輦）　桃
日傘さす子を信よとて女の庵　帰
衣を捨てから身世の中　桃里
酒の色に谷乃松原も仏心　道
狩人の家の湖乃松明　良
落武者は此日の庭の草ふ草　桃
霧の遁ける手本の行そさ　綿
日中は鐘つく瀬になりたる身　了
一釜乃蕎麦もかゝり得かぬ　良
乞食ともきくてうき世の秋風　嵐
湖乃此前こと月にの明　桃
蕎麦に搗く猿の涼や涼ぬらん　道
流人紫川終りとの着　了
今宵の又夜日と渾ひ石の上　す
泉とさ波ゝ高き滝の音波　良
縁の手に雲と乃て龍ま　帰
奥の風雅を主にあふ　鴻
踏しまり神を古まり雨て　桃雲
添生若衆き此蝉日　桃秋　里

奥州岩瀬郡相楽伊左衛門亭にて

風流のはじめやおくの田植歌　翁
いちご折て我まうけ草　等躬
水せきて昼寝の石やなをすらん　曽良
籮に茶摘の音せかし　翁
一ふしに月に並ある川柳　等躬
晩の廿日上臈会仏事を浸て　良
世をとある事にやとむむ花　芭
この付ハ蝶まで此へぬし弟　躬
棹乃小枝に露と隠て　良
振ふて八嶋の畠の名もなし　道
雪倦やすや白髪おひらけ　躬
湖豊に事を送る帝にまいく　良
ある夜の雲突破る扉の角　道
秋とさる身を古傍し俺　躬
扇乃辺伽の涯ふとろ月　良
多く此祈をきることより飛く　道
かなしさ骨を盤こいと中　躬
良

山鳥の尾にを年やむかふらん　蕉
芹掘はかり清水つめたき　躬
薪引雪車一すちの跡見えて　良
おのおの武士の冬籠る宿　蕉
筆とらぬものゆへ恋の世にあはす　躬
宮にめされしうき名はつかし　良
手枕に細き肱をさし入て　蕉
何ゆへの事のたらぬ七夕　躬
住かへる宿の柱の月を見よ　良
薄あからむ六条か髪　蕉
切樒枝うるさゝは挑捨し　躬
太山にたくみの髪はそるらし　良
さひしさや湯守も寒くなりぬらん　蕉
殺生石の下はしる水　躬
色をきたるに掛物を拝く　良
酒乃戸まひの砕る夜風　蕉
六十の後こそ人の正月なれ　躬
誓納ある家に小袖きぬる　良

元禄二年卯月廿四日
梁井孫三郎宅にて
隠家やめにたゝぬ花を軒の栗　翁
まれに螢のとまる露草　栗斎
切崩す山の井の名は有ふれて　等躬
畔つたひする石の棚はし　曾良
若かるゝ世の業に月と見のまれ　等雲
蒼屋乃穐いはとさひしき　須竿
椿子よ鳥の羽乃露を初ぬそて　素蘭
頭芽ともよれるあへきの巻　蕉
松蕈取よ喰ひたる年の暮　竿
酒乃きこ帳を吹ふ敷し　躬
尋合ふ詩よ吟てもさらうな　良
さめくと送さる傾城の哥　栗
賀しさを袖よつゝむ摘さ子　等
月の花洛ゝもまりまる　栗
桜して奥鶴落しる附る　躬
笠乃端とするあしのうら杖　秋
極まひく神楽や古雅八坂の時　蕉
うとのる谷に拂鼓打く　良

ちるほとに扇をたゝむ香れあり　桑
あゆみさだめぬ旦切受さうき　朔
まつ雛をいさめる手の引く　等
かへし婿れ膝や打もたき　蕉
鵜飼の多さへ古き所の鯀　林
朴琢る家市のはら碑　蛇
引僧に三社乃花を戴きて　友
参合そしる明六つれ鐘　象
四五日ハ諸暦乃暮に剃く　朔
さりとて月とえふるあさのや　秋
冬枯くらひ茶き里乃むらさち　去
麻乃着絶て念ふぬ家　良
冠をも落着ちりて江三界　蕉
文にをつゐしおもひそ恥　朔
素手に遠流し世にうときみ人　桑
言ひもせきこう言す家の左　秋
今は四門に法乃古の山　友
清えめ琢とむる董生の墟　乙

丈草
きひしさの夜ぬけて休みされかり　去来
ちらし/\ひらる梅の仔犬　芭蕉
鯨引沖に一漬泳あけて　嵐蘭
苗うゑ初る秋の雲　来
はるけけの入日に月のおもかげ　草
露におほつかき旅のかへりて　蘭
手付のわつろにすまぬ初手に　蕉
戸扉てりつゝまるぬ丁寧　草
里留て実を梅田乃丘境　来
から泣血くゆき世の修行人　蕉
沈ふるに草鞋ふされ二階堂　蘭
燕子灯の寄る船越のふ舎　来
陀羅尼や経くりて金杯に月の鶴　蘭
書きれの実をたやす椿囃　草
踊場よかゝりて世更の三千歩　蕉
清きつれの袖をも引さく　蘭
冊子の紫きるぬれても筐　草
小本の摺乃まほふ宜甚　来

い　雲　九　き

白川の武威をふるへる佩和　蕉
治てよ残するまの上座とし　琢
湯飛よ又百計の菓乃跡　来
岩ゐれ育て乃家かさなる　子
町端の陵掃ながら火を焼す　琢
死を忘れみる紀文の光景　蕉
月読の讃なくされ嵩の絵　子
内裏の供に入し牛の子　来
萩垣乃川を旅る京の衆　蕉
墓におもふ秋ゐ寒まくり　琢
傘ねにやるほどもなき月の雲　来
挑灯さすく切の程云　子
諸究の庭にすつる広の衣　蕉
肌て寒味よき豕の肉安　琢
はかりなれたまるとする草離子　子
ほをもゆらぬ医者の気袖　来
茶に咲て新緑あたらき荒苔　蕉
他国まで風かにかくさむ　琢

大石田高野平右衛門亭にて　芭蕉

五月雨を集てすゞし最上川
岸にほたるを繋ぐ舟杭　一栄
瓜畑いざよふ空に影待て　曽良
里をむかひに桑の細道　川水
牛の子に心なぐさむ夕間暮　栄
水雲重しふところの吟　蕉
侘笠を枕にたてゝ山おろし　水
松むすびおく国の境目　良
永楽の古き寺領を戴て　蕉
夢とあはする大鷹の紙　栄
たきゞの名を暁とこたへる　良
風ゐさつ氣双六の石　水
寒よる篳子児の庵へ入く　栄
娘みへりし岩城秋風　蕉
あかゝる手子の月社参籠　水
旅してよく撰く布子紙　良
苔の後糸と繊まる花むかう　栄
涅槃いとなむ山かげの塔　水

稚子村ハ浮世の外の春富て　蕉
力持たる甲斐乃一乱　良
むそう坊人もしらぬ寐所に　水
その古さしれる松の本　栄
星祭る髪ハ白毛もうるさき　良
集り遊めのつやともむる月　蕉
麻衣第に貴くさとかし塗木履　栄
紫雲に出く家路わすれし　水
ねふさ噂木陰を定のうちかみ　蕉
多く宿す茶日の鐘　良
古人乃友にも語をかへり　水
あきも傷める舟の家合　栄
雪みそき師走の市に名をこそ　良
煤掃の日と草庵乃客　蕉
なまき人と古き懐旧に寝てれ　栄
やとも免稽のまつ入相　水
平泝ミ明日も越へき峯の花　蕉
山田の種をいはふむらさめ　良

羽黒ニ参籠して後重行閣ニ
あり重りて月刈　素然
めつらしや山をいで羽の初茄子　翁
蝉に車の音添る井戸　重行
絹機の暮閙しう梭打て　曽良
閏弥生もすゑの三ヶ月　露丸
家おもふ衣らしき勢の旅　利
鶴とも胡蝶と付し道　蕉
山の端よきえ行くてかれかれ　丸
雲くしぬ里に心ともしれ　良
粟稗を日毎の勢に涼飽て　利
弓れかと刈る石の戸　蕉
赤樫と母の記念に植おかれ　良
雀よ持ち小田乃刈初　丸
此務もつの板橋留まり　利
板多くしもちて稲やる月　蕉
衣くも夜多人も向しるの鐘　丸
宿の女は妬きその行　良
舞入乃茶ひろなにも新郭く　利
わらは廓々畑に焼くる　丸

金鉢の菓も一宇にあつかれり　蕉
ちかけ乃郡に豆腐ちゝめる　打
此宿に先あさまとや蒼捨て　良
露寒おかし化猿うつし　蕉
逢さき八月を泥脛に紙紅　丸
雪ぐくふ友とうき努く　良
千日の篭をむまれ小松原　打
埋生乃うしと踏はむ古寺　丸
頼光城のあたりと鳥え吹つゝむ　蕉
はあらく篝さ女郎むそそ　打
明もつる月と打御の守にかんへ　良
湿泉うそ家　隆興の秋風　蕉
和了乃ほまりまりの串挟　丸
山焦ら作る冬のふさ之　良
尼衣男まかまぬころすそ　打
打かまみつき新れ清き揺　丸
荒の時鳴をかふ吹子呼子鳥　蕉
鉢出る霊し春此山老　良

出羽酒田乃湊伊東不玉亭にて
袖乃浦に上る晩望　ばせを

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ
海松かる磯にたゝむ帆莚　不玉
月出ハ関屋をかためん酒持て　曾良
土もの竃乃けふる秋かせ　蕉
しるしゝて堀にやりたる色紙　玉
萎れて帰る市のあき人　良
鳴る屋籠る鵙伯の石に老の霜　蕉
光と身くゝけに白髪ぬけて　玉
海乙も衣もなきを切せぬあ　良
松笠に紙武隈の土産　蕉
宗祇おうし我旅も言わく　玉
ちまきの神にかん様こと　良
巫供しくあくなき歌も思ひ立　蕉
此世乃末をみよしのに入　玉
物とめ妻帯るの隠乃姿　良
冬室も命を鳴の乞食　蕉
かゝける花し我ると菜薫　玉
朧乃庵の簾ともれ月　良

物いへハ木魂にひゝく春の風
すかたハ滝に消る山姫
剛力か腕つゝ乃誰さる無俤
棺をおさむる塚のあら芝
ちる霜ハよしなき岩を粧らん
ゑひ衆の衣縫くそ泣
明日ハ死ぬ命を儀に生て
月さへもさとき陣中乃市
此寒さに着られぬ縫流
小袖を仕るを送る旅の脈
家貧の母に似るもゆかしく
気にハあらぬ家ハ他ともるも
奈良乃京持伝へたる古今集
あるし討切る坊乃酒くさ
雪代草を立そよる相つひ
誓種うゝきて筆にまかれ
孫か手を作りて古き衣を見ん
こゝを紅色をとこの山家　翁

玉　翁　良　翁　玉　良　翁　玉　良　翁　玉　良　翁　玉　翁　良

羽黒山本坊におゐて興行

有難や雪をかほらす風の音　翁
住程人乃むすふ夏草　露丸
川舟の綱に蛍を引立て　曾良
鵜の飛跡に見ゆる三日月　釣雪
澄水に天も浮る秋の風　珠妙
北も南も砧うつなり　梨水
ねむりて昼のかけりに笠脱て　雪
百里の旅を木曾の牛追　翁
山つくす心に城の記をかゝん　丸
斧持すくむ神木の森　良
歌よみの跡したひ行宿なくて　雪
豆うたぬ夜ハ何となく鬼　丸
古御所を寺になしたる檜皮葺　翁
糸に立枝にさまさまの花　水
月見よと引起されて恥しき　良
髪あふかする羅の露　翁
まつはるゝ犬のかさしに袖かりて　丸
的場乃末に咲る山吹　雪

来ぐと雉し七つのとし此力石　素
滝くゞりてく碓ヶ井の水　九
足引のこしかたまても蔭蕪　田入
歌のつけ二字に悔子なり　良
うき消す身八聖中の地蔵まで　九
妻恋するゝ山犬の声　重
荒雪ハ椽の枯葉の乃ぞ寒く　不
酒の色身覚る数日哉まで　九
離乃家と稲荷に参と剣て　雪
来てうけ去ほる宝網の法　入
月山のあらし此風に背に花を　良
脈治ヶ火焼を編つ戸の春　水
霰なる桐に見付し左　九
紫の手おもろく行蔵の宗　雪
盗人に隠まて妹ヶ宿を渡て　重
以の下もつきぬ開くの秋　良
盃此さく三寸に流と奥の波　含笑
幕打ある乙鳥此翁　不

珠妙老能清帰る　田入
的書記
会見本坊　江府被立ち

出羽の所にて

御尋乃我宿せはし破蚊帳　風流
はしめてかほる風の薫物　芭蕉
菊作り鍬に薄を折添て　孤松
霧立かくす虹のもとすゑ　曾良
そゞろなる月に二里隔けり　柳風
馬市くれて駒むかへせん　執筆
まけける父か弓矢を取伝へ　蕉
筆おろして剃と定むる僧　流
梅さくと三寸もつまし鹿髭子　良
簾くと揚て画を流しける　仁　如柳
三輪さかる菱に古ての出るねき　木端
浪乃音きく嶋此暮　示　風
雪まちぬ松ぶおのまをからり　柳
蕣踏志ける猿乃渡戸　蕉
川ぶるし月と菀の小社すゞく　松
底洗んと寄てくなをり　流
霰ぶの今小袖と花を見人　蕉
頃とて清き庭一家乃石　良

紫さと筆とひそかる書のれ　流
果なき恋しあふなきさうや死　鶯
独ゝ炉燵を夢に立帰く　風
ほとさんの軒下風呂乃香う　柳
老僧の呼く小盃をしめんせ　遊
武士みさき入東西乃門　良
おのつから庵て帰なる奥州　鶯
羽織に流して葦 枯の月　渓
秋のそく枝みまさん人笈乃笠　柳
うかひ舩さる岩濃の岩波　蕉
斎に杖を手と取る夕月夜　風
出陣の旗にみ帰るうてや火　鶯
なまり信仰の者も添すて　遊
よまさくなき禰宜の白張　流
ほうくし石の如くの崩ちう　風
志らさる山も雨の春まく　渓
嗅かる香とたよ袖あふる中　鶯
鶯うら旅に話すのやや　良

右十八出羽国出湯にて催す
渋谷甚兵衛あり

元禄二秋翁に伴ひて山中
温泉に遊ぶ時両の三吟

馬かりて燕追ひ行わかれかな　北枝
花野にみだるゝ山のまがりめ　曾良
月よしと角力に袴踏ぬぎて　芭蕉
鞘ばしりしをやがてとめけり　枝
青淵に獺の飛込水の音　良
柴かりこかす峯の笹道　蕉
霰降る左の山は菅の寺　枝
遊女四五人田舎わたらひ　良
落書に恋しき君が名もありて　蕉
髪はそらねど魚くはぬなり　枝
蓮の糸とるも中々罪ふかき　良
先祖乃貧を伝へたる門　蕉
有明の寮は上座かさくなる　枝
寺に月拂に擶乃ち弁　良
秋風は物言ぬ子も涙にて　蕉
白き袂の続く葬礼　枝
花の香は古き都の町作り　良
春をわするゝ雲仍の箱　蕉

古寺やちらし鐙の貝深し　枝
鍬乃小隅に出る芹焼　兮
手ふりてよ志よ波の塀きり捨ひ　荷
見しりのとのそく霞西　枝
つぎ小袖薫物賣乃古風なり　荷
能蕊人する乞食の菜留　、
暗かり川夢に尿くも沸きぬ　枝
あそまきに飛ぶ三日月の暇　、
初發心草の枕に旅れしく　荷
小情もちらく伊勢の神風　、
疱瘡乃案外白みをやりる　枝
ゐるもき墨し枇杷つちる之　、
西せよ仙女代姿たとやふ　荷
門うち待と志ほるゝ代白浪　、
仲綴う宇治の網代と寺の縁　枝
ちるよ使とゑ川尿口上　、
鐘撞く挽く人ゑの霰かゝり　荷
砕粕人と孫生まる中く　筆

元禄二年九月
二泊荷葉集　路通
花とちる尺かける萩の枕かな
むしろ傘とうけ綿の下　蓑夕
徒子もむ夕なりまよ月すゞて　向之
わらしよかわむ笹のこおゝさ　残夜
桂木屋ハうく本よ斬をかくすし　芭蕉
今のあちやぬるすハ覚え次　草良
肌ぬるくよ人まさろ夕月夜　夕
児そくの代と紀のおとしさ　遊
葉や茶の烟ま添し夜羽華簾　良
西ところしく秋葉咲入　本肉
葉まなとみの宮く呼まゝ(イ二夜)　夜
月見むけし猿乃碧来　之
さむくの良ひろゐる布袋　荷
地獄絵とかくちゝ代あき　茴
ふぬくの尻目に蘿と悩らん　因
猫る堀根よなやむ西新　松
豆腐ひし書さへせぬ里の酒　之
魯代菓なりと住あし玉庵　荷

きさらぎや蘭(?)打甲斐もたえて　ア
嵐てしひろ霜(?)此の星　良
笹辛(?)子舟に宗(?)積りゑしく　夜
卅(?)ころ窓に鳥(?)と夢見まする　通
文出て名の覚(?)体の饒(?)應　荘
揺らし揺へおもひうらめる　之
たゝるときハ總(?)陛(?)楽の幽しき　夜
葉いつらし今はほとゝに　西
田と覚て俤しくもなき来門　道
犬吠うる泰(?)乃入口　夕
夕月夜筏を漫に流さて　良
そゞろく寒き秋の崖焼(?)　松
谷蛙よ新酒と春とよるかし　夕
ちやさ(?)豊此稗き株よ　西
打解て恩をも浅る鶴降(?)（イニ奏下さえてミ夷）　之
春も加けて一ふとの花　道
鳥居て道に居て古風(?)星　夕
こゝろよしけらうきの院(?)　執筆

三月廿日即興

花咲て七日鶴見る麓かな　芭蕉
懼て蛙のわたる細橋　清風
足踏本を春まきちらす筏(?)　峯白
家一番とはやる帘の店　亀良
名月に隣をねらふ子あけて　コ舜
枝ゑんるしき桐の葉を刈(?)　其角
墨染をふるく八（イニ蝶）蝶の切し家で　凡
内卯乃か向　辞じ竹利手(?)　白
すまに立付手の使いそめつき　良
一夜のちぎり錦(?)川ゑする　道
松明に白えんといゑ実ハゑそ(?)　角
せく掉子の舟小流り(?)　凡
新敷ゑまきぬ歌を世すなげき　良
てゝし此餅をおのみ山寺　秋
雪を踏桜や椿を春てらえて(?)　心
物乃はしりえ月代白みかゝる(?)　角
古川にて八溜の砥礎を凡ぼし(?)　荘
三川ちく麻の一つ舌と庵ふ(?)　秋

鞆ろと軍にまみる鈴す笛　嵐雪
男なれ此心剃とめ哉　風
膝寒に帽の風雅を忘れける　角
涙おちて牡丹ちり流く　白
耳ちとく姉が告ける杜宇　道
来る宿も乗居は草屋として飛　良
机焼て力えうり八僧なり　風
家ゐ川霧と夜の肉華　角
楠もちち程ゐ御くに漢添く　秋
宗乃月夜なきそおとろへ　雪
おとなすくもの痛人の稽事は　角
眉ぬく袖乃琴筆うふさき　蕉
かしの空三後ぬ所ともちやりて　良
いとをし　胃子は宮の山乃　無
会さ八谷屋に挟し被網　風
何やしなくて塩やあゐ浦　無
相西乃桂なひ乏ん杢と松　道
車をかりて去のやまも花　風

鶯に朝日さす也竹格子　浪化
礼おこたらしく春の静さ　去来
出見世への土産や化粧合すらん　、
まさは乃ひとり寝る夜荒　化
小鍵切寒さも過し夢の月　、
広い所を危ふ家　来
旅人は狸をかくす田舎道　、
鶯乃奥な六月の赤　化
雷る網を一をいはちらし　、
かやし紀善子堂の裏町　来
云分のちすりくと鍔る鹿ろ　、
梅咲きそこを出て出す　化
年中を松乃内より料理喰　、
伊勢乃伏日の帰しき春　来
上紙の本海合羽に傘さして　、
須磨代手遊八八ツ下りし　化
名月の種様子かくし合　、
一分てとなる梨子の切お

むしろの縁 盾にかゝる秋の風 道
不足な事を理にて拵へる 去
右の手が旅の役者に借るなり 、
足掛て寄る 相撲の文 化
せ物とつめひく色ある紙の紺 、
まる田ら行方もて中ありの凡 蕉
平めなる石を炭なりのかゝ場 、
法佐とまちくる丈々食塩 来
自害き夜の塩梅を見てる 、
陸奥根ハよほとききう 前 化
思ひけると通よわとおりけせて 、
またくうしか出去来の傍軍 来
年寄とは宅を迄もゆかしけう 化
みな月を鍛目よるみよこ雲 蕉
蒼ふう 構ふ邸の笑こほれ 来
四五人 直る 使も只なり 化
新色町の子供の稽古総 蕉
いつ迄もまてよするか世の中 来

・ ト ナ ミ ヤ ニ

紫陌とこけかくる所乃居らか 去来
賢松有燦の帯ある夢 浪化
出荷枕手振の人を呼しく 芭蕉
聟ともに依乃月夕ときまく 之道
半時ほと夜のうちなる月の入 丈艸
常代をとちくと鍛る溜竃 支考
新口を薦遣ふて秀讃お 惟然
見事とともに見ゆとあのむる 野童
切立く畠見渡せ丹波山 野明
すゝろく お七をたゞありお 来
窓合を鯨乃ふろぬ汐汁 卮
いりよぎけしけ鋭のさや 艸
ちらくとゆる風呂敷挽くたとや 考
こうさくくと鍛く乗の茶 然
秋川のけく流るし夕月歌 童
寄去をくれとも 程蘇まてつく 明
百まとむ乃け陰乃尼屋敷 芝
菜種おはうけ雨ととれき虫 来

市香ノ庵

世ハ桜厳よめし宗匠の春　艸
禅坊乃公事のむつかしき　秀
鉛のやうな息子ゑとゑ逃さやう　鈴
俵つきあちらこち汁粉盛きを　竜
そこ枝の蓑く一ふよ修る経　明
修上のめく葛多つめる家　乙
菊小紋ゑ口の十徳乃まんなると　来
手枕さ川くと秋ハ暮まゐ　艸
此夕ア月と望まれ山なとり　秀
海ゝ島乃写子かく清く　鈴
雨宿つく鉢の春のそろくと　竜
罕ふおかまる市さ小屋掛　的
世の化との吹し静かりて　乙
聲ゝと湯乃東る桜桜　秀
御庵の壁下しては洞を　艸
塗ゝ箱より衆の出しへ　其
花の香さ暫く止め寒さア　鈴
目に沖一日多れ囀る家　明

唐桥舎乱吟

柳小杉斤蔵ハ春し初荒　[illegible]
宮川挿る匠中乃稈　酒堂
村もとめ里より国よおあらまて　玄来
堀かけ渡をまおおん烟　文秀
月のある河のなかむ水の端　丈艸
小鍋ゐ煮く砂かし思付　素牛
上をさへそこらと待葉余　童
手桶を入るおまの糸　其
塵かも食ハいつまてさて　来
大工乃邦ゐよ振とる　秀
舟樋乃水汲ゐる庫裡の先　牛
像をまらく那波利とやる　童
隊おしも売る西乃ちさしをと　艸
急しくや外よちゑる洗足　来
赤鏡も焼之鏡と友好み　童
里きくあらす桜の木比妻　牛
月花よ小字門を出川へつ　其
菓たろまも児の出る腰夜　童

酒をよ戯す付る醫師の佗　艸
新茶のかさ乃あつまりてくる　蕪
庁に乃涌まをそ川を指出して　董
近後家のむかしの乃不錯　来
うとき寝乃一遍寝ずに後り　考
御前にあんと猿の田楽　嵐
追出乃縄を藏のまくらする　亭
偽乃明屋あり　時うす　牛
葬礼の綴く経よむ屋が坊　来
手拭　頭くれる牛式傍　考
川ひとつ渡て実父有所あり　蕪
岩まのきそる　田上は庵　艸
正月もいやな小身しは背負る　董
種漬まきるそ乃名代　来
空谷の行恩しひと塩鯉　牛
彼岸とかくおぼろさまや　艸
出格をぬきとる方地思い泉　考
後ろに寄乃夜の葉　来

衣装して梅段むるなはひうれ　曽良
蝶免うしなへの乃枕　前川
掃よきく清る雪とや田すらん　路通
石乃塗り墨を搦なり　芭蕉
月積る世乃高まと踏あく　川
梢さす猿の悟る　革畠　酉
娘子の祢宜恵子　秋の風　蕉
茜海干し宮此あやうけ　良
あらきあく泉そる忍の旅（イニ旅泊）　川
ちる乃御情の飛の深さよ　良
振よそく我あてしれぬ犬の聲　通
籠此なるそを町よ座めん　川
手作の酒乃かくしも付に分　良
月とこえひと尺然るは市　蕉
精なを旅の夏よ寺に麻雨　通
西南さな名をとおへ去りとや　蕉
菀の茶ある室の瀬よ后を飼　酉
古葉は鵜の子をむらぬ奇　良

讀書に倦まとき出の夢　川
流れ〳〵去れ愚水乃札　言
夜の寝覚若なし法蓮の門　蕪
こぼれし星乃露文霊風　亞
ゑ草も寡しぬる破の屏　良
桂西へ行る田代中の小田　川
子規聴くや夜は吟つる翁　亞
我翁おもひさき世一人　蕪
然ゑとい也んと去僧吃まて　川
ちまく乃家中の戸代作藤　イ三良 蕪
移よ月とされ種の夕月夜　イニ蕪 良
淀しの女しき客の象　亞
谷と替え岩の洞まる花篭　良
母とまり我れ将棲　蕪
裏ある父乃白髪と寒ま掛く　亞
おもの告る艸乃川翁　川
入寒く雁里すれ北の奥　蕪
何ぞ何寡しまれしき　川

鴨　、　七　、

蓼や條よ蔓する梯乃さ紀　ちぬき浪
見もしまりつ世あつらま　彦
やみ食ち名藪へと見をみく　、
なく汚く雅り筆揃し　蕪
村鳥月たくよ帰る原る　、
風も吹らぬよ無代巣の家　彦
前の倉せゝかゝる時佩寒き　、
暑月代る事も辰るさむし　蕪
くろ〳〵と音する雨と路まる　、
尾にまれ名を諸新巣鮎　、
二三年川の八重咲ぬごとく　彦
鬢とややしく見送る旅　、
空夜に入り焼つける暑の月　蕪
檪織きぬを角力取の草　、
何霞の田へゆくや扇の吟連く　彦
夜明乃是のまゝ一つ寺も　、
内旅よ書壇も巫ところ　蕪
白い清しよみの三郎へ　、

酒宴は傘干を側に姥かなり　芦
手紙と捨る人の老を云ふ　、
牢脱の我れ夢のくがいと寝り　越
今を名乗らぬ猫を捨在り　、
松風の音ゆくと吹く夜は寒し　芦
拝むからあかしと荷る門の霜　蕉
湯八千代よくは聞す、去りし捕　芦
する一足つくり箸置きと能見　、
中網帝の時ぞ在る童子人　越
病かなき名わし女房とり捨　、
むさし野は煤しひ月の冷まし　芦
はの襖ぎ放きし夫に箱川　、
二の丸代光りやく今屏風　蕉
扇もあらわくほんの初日　、
恥しくと茶壺の合せと混仕舞　芦
口上いつくぬめと雫薫　、
氏神の音も蝉に咲散ひ　、
名る暦と撫く伸る青柳　、

元禄二仲春

嗒山旅宿にて

かげろふの我肩にたつ紙子哉　ばせを
水やなくはるけきかり鳥　曾良
松が宿あかしのあこかれて　嗒山
見る旅初めし膳のこしかけ　此筋
いさよひも思ひしまま旅に宿り　己
紙子さへ代かく代責乃稜　筋
繁栄は寄りに越えても面白き　蕉
納むかり　捨てふ作の女いまや川　山
五月ゆふ小袖の縫て豚あらせ　越
あらうる髪を兵を寄っつき　良
こなられくこみくるにあれ　筋
春くく事方文のや市しなよ　山
息とそこるに出前羽まきて　良
手家一人白侍つとむ哉　蕉
その声も哀れ其をそふきの名　荷
桐の葉のしく其陰乃葉　山
身ひくるま明る東八身しとる　蕉
浪から冥その味しとうるとか　、

客よひく酒手なくてのいつ幾　荳
いぬる追さしいちれむしる　良
捧物乃と川雪を積みの脱く　山
恕く火とふく続つきの妻　荳
引越まよ山子てつる星月秋　荷
絵くこゝを九　康熙之なり　山
山風のしきひしる店ち雪中のいう　良
思ふ本少も画る名はけの小屋　鋸
更りたぬと肴をやまさる虫見ひ　荳
あつ峰てゆ了てなみさうけつく　荷
猿乃妻しくあなる菱代月　嵐竹
三川のいえやよ佛つくりて　山
夏君に孔訪の如湯の滞留　荳
瀧藤俺る開のうらきの　良
何ゆく人の従者さ召とさけて　荷
提りまへまこて網のとな嫌　山
一川の岩尼衣の夏くくり　鋸
済くふ穀夏乃もち出写之　竹

元禄二の霜月朔日
伊賀良品亭にて
いさ子供とりまとあそひ見む霰　ちよ成
折敷に突るな桜くの仙　良品
畑等は風止む後よ袖寄さく　橘風
居角力ちりむ月のさむう　文蕪
康の夏蓑乃僧ゑ代気すか　士芳
ゆうしく蔵る半片の雲寮　半残
驚けの也なき夜に寺析く　呂
ありふくら代掘の昔しあ　兌
常なかくし磨平千徳る海士の妻　嵐
清うきも面をいよ面の月なそ　風
夏秋恐しくよ鼻かくしさる　残
ふ夏をとしてとや別をなる　芳
るれ着侍軍達のとうくよ　荳
月入うゑ笑士乃のりて赤　風
縦の風の簾ふらくいを出ぬそ　不
篇よけ侍る薮の山かくう　蕊
画くし打そ雪にぬき毛の笠　芳
羽織掛へとく英の余文　荳

秋ゑて耕すをおもふの先　風
芦代田つる穂朝乃露　猶
芝川高く出下の句を出しけり　菱
町にも名し奥州宮　不
落し茶番か草も跡に泣かれ　藤
林えつまり張る女子の夜ん　風
商るのみぞ別まハある瀧の音　芳
風雅仕上し酒呑乃童子　苳
世の中ハ操瀑る擔ころも　不
強くさ石にんで佛拘へて　𡈽
瑠璃燈を月とぐらかしてる　爪
便乃蝶剃色代ゆかれ　燕
出る毛なまめくなりと語うて　魚
恥ハかけと畔に細き家　風
すましまて多能て呑ぬもの楽　不
山髪青のう袖子かへつる　芳
危義長のあてきより花を孫　踏
なかりも雲となりにけり空を　菽

元禄四年九月日
うらやまし紀稲乃穂並の朝日影　路通
隣もさなから所海池乃水　昌房
山陰の閑より始おそめく　芭蕉
蝋燭乃火をと貰ふ夕月　正秀
秋またく根香の茶繁から落る　野径
まうりく乱をちぼる恵のまろ　乙州
一幕ちるをやおしもする心殺家　登好
身ハ出うすと碗く悩けり　珍碩
あさ衣つき来と秋とハ定まる　盤子
金端りへら洞乃とかしたく　里東
四乃中ょ以くつき宿の許京也　探志
芝居の札乃米あつ兎なり　游刀
御嶽より暇も不自由な旅の為　秀
挽寒を志める常乃徒也　通
月影三階の部を淳安俯けき　好
若麦代句ひめもする下積　東
つまみつや海手代宮の鑑之　刀
東風吹おぼる菓子の鏡　子

むら雨の鶴なつかしき霧　秀
豆腐上手におはしけり宮詣　頎
うしろ見て蕎麦を残して洞の脇　州
手向れと捨し夕日の影見　西
旧縁をすてゝこそみにしむの旅　蕉
浪乃さしよするる月の廻廊　章
菊の香の岩屋の坊を折咲き　子
みれおのゝ音を鳴らし虫　州
うとさかきやさしけ膝まくらき　頎
白髪をさし物と薫のちかめ　蕉
社や寺の鐘を継ぎく　好
夜の月りのひる竹の子の霧　佳
文は川三丈文送く川も　西
空綿捍やる窓にて来　力
おさへうる風を縫におし　房
草履ふくらむ唐風呂の漏　子
内裏にてはへ女房との猫　頎
燕乃あへぬきや久家房　佳

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉
かさあたらしき春の曙　乙州
雲雀なく小田に土持比なれや　珎碩
しとぎ祝うて下されにけり　素男
片隅に虫歯かゝえて暮の月　州
二階の客はたゝれたる秋　蕉
放やるうづらの跡は見えもせず　男
稲の葉延の力なき風　碩
発心のはじめにこゆる鈴鹿山　蕉
内蔵頭かと呼声はたれ　州
卯の刻の箕手に並ぶ小西方　碩
すみきる松のしづかなりけり　男
萩の札すゝきの札によみなして　州
雀かたよる百舌鳥の一声　智月
懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海づら　州
鑓の柄に立すがりたる花の暮　去来
灰まきちらすからしなの跡　兆

まれ日は仕舞て帰る経机　正秀
店屋物くふ供の手がはり　去来
汗ぬぐひ端のきれしの紺の糸　半残
わうむこせハしくよ雛ハ下　土芳
大擔よおもひくまなき宮の空　残
身ハぬれしものゝそれ所なき　芳
小刀の蛤なれ細工をし　残
桐よ火とぼす上たてしの衣　園風
とかくハ松の侍に須磨の浦　猿雖
むつ月の金を見るかな男　以
此頃もまれめとる破ます家　凡
習ひ由緒きやくしたがひ月見る　雖
嗜髪の講ハちうさ編つゝひ　芳
伴つれはとてめん女新　風
取なき画を写ひる含味哉　芭蕉
うすとぎる家行の剃下駄　史邦
荒まゝことし此つまで定下ルゝ　野水
雛の袴を染るゝ紅　羽紅

元禄三年

市中ハ物のにほひや夏の月　凡兆
あつしあつしと門々の声　芭蕉
二番艸取りも果さず穂に出て　去来
灰うちたゝくうるめ一枚　兆
此筋ハ銀も見しらず不自由さよ　蕉
たゞとひやうしに長き脇指　来
草村に蛙こはがる夕まぐれ　兆
蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉
道心のおこりハ花のつぼむ時　来
能登の七尾の冬ハ住うき　兆
魚の骨しはぶる迄の老を見て　蕉
待人入し小御門の鎰　来
立かゝり屏風を倒す女子共　兆
湯殿ハ竹の簀子侘しき　蕉
茴香の実を吹落す夕嵐　来
僧やゝさむく寺にかへるか　兆
猿引の猿と世を経る秋の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　来

五六本生木つけたる潴　兆
足袋ふみよごす黒ぼこの道　蕉
追たてゝ早き御馬の刀持　来
でつちが荷ふ水こぼしたり　兆
戸障子もむしろがこひの売屋敷　蕉
てんじやうまもりいつか色づく　来
こそこそと草鞋を作る月夜さし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
そのまゝにころび落たる升落　来
ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵に暫く居ては打やぶり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　来
さまざまに品かはりたる恋をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
なに故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ　来
御留守となれば広き板敷　兆
手のひらに虱這はする花のかげ　蕉
かすみうごかぬ昼のねむたさ　来

灰汁桶の雫やみけりきり〴〵す　凡兆
あぶらかすりて宵寝する秋　芭蕉
新畳敷ならしたる月かげに　野水
ならべて嬉し十のさかづき　去来
千代経べき物を様々子日して　蕉
鶯の音にたびら雪降る　兆
乗出して肱に余る春の駒　来
摩耶が高根に雲のかゝれる　水
ゆふめしにかますご喰へば風薫る　兆
蛭の口処をかきて気味よき　蕉
ものおもひけふは忘れて休む日に　水
迎せはしき殿よりのふみ　来
金鍔と人によばるゝ身のやすさ　蕉
あつ風呂ずきの宵々の月　兆
町内の秋も更行明やしき　来
何を見るにも露ばかり也　水
花とちる身は西念が衣着て　蕉
木曽の酢茎に春もくれつゝ　兆

かへるやら山陰伝ふ四十から　水
柴さす家のむねをからげる　来
冬空のあれに成たる北颪　兆
旅の馳走に有明しおく　蕉
すさまじき女の智恵もはかなくて　来
何おもひ草狼のなく　水
夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉
人もわすれしあかそぶの水　兆
うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水
又も大事の鮓を取出す　来
堤より田の青やぎていさぎよき　兆
加茂のやしろは能き社なり　蕉
物うりの尻声高く名乗すて　来
雨のやどりの無常迅速　水
昼ねぶる青鷺の身のたふとさよ　蕉
しよろしよろ水に藺のそよぐらん　兆
糸桜腹いつぱいに咲にけり　来
春は三月曙のそら　水

去来
鳶の羽も刷ぬはつしぐれ
芭　凡　史
一ふき風の木の葉しづまる　蕉
股引の朝からぬるる川こえて　兆
たぬきをおどす篠張の弓　邦
まいら戸に蔦這かかる宵の月　蕉
人にもくれず名物の梨　来
かきなぐる墨絵おかしく秋暮て　邦
はきごころよきめりやすの足袋　兆
何事も無言の内はしづかなり　来
里見え初て午の貝ふく　蕉
ほつれたる去年のねござのしたたるく　兆
芙蓉のはなのはらはらとちる　邦
吸物は先出来されしすいぜんじ　蕉
三里あまりの道かかえける　来
此春も盧同が男居なりにて　邦
さし木つきたる月の朧夜　兆
苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉
ひとり直りし今朝の腹だち　来

いちどきに二日の物も喰て置　兆
雪げにさむき嶋乃小がらす　邦
火ともしに暮れば登る峯の寺　来
ほとゝぎす皆鳴仕舞けり　蕉
痩骨のまだ起直る力なき　邦
隣をかりて車引こむ　兆
うき人を枳殻垣よりくゞらせん　蕉
いまや別乃刀さしだす　来
せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆
思ひ切たる死ぐるひ見よ　邦
青天に有明月の朝ぼらけ　来
湖水の秋乃比良の初霜　蕉
柴の戸や蕎麦盗まれて歌を讀　邦
布子着習ふ風の夕暮　兆
押合て寝ては又立つかりまくら　蕉
たゝらの雲乃まだ赤き空　来
一構鞦つくる窓のはな　兆
枇杷乃古葉に木芽もえたつ　邦

塞　額

今日斗人も年よれ初しぐれ　ばせを　許六
野は仕付たる麦乃あら土　洒堂
油實を買んと小粒の吟味して　岱水
汁乃煮へたつ秋の風かな　岱蒙
宿の月奥へ入手と古たゝみ　卓
先ニ出たる坂屋の錦　为
戌はりの侍客中に惜まれて　嵐
焚に焦れし盆の出までと消え　六
縁汲む笹の葉にさす澱も　堂
悟り磑との京の入口　蒙
まかせ讃ハぬ人もあまりさ　为
私道のけさ蛸乃喰絶　嵐
青寫ハあてぬ袖の交はし　六
ゆすり萩の風掛まき豆　堂
八月ハ旅なしらぬ小幡縞　嵐
焼やり紙の雲代赤ぞけ　为
お戯も畑を弥の木はゑて　嵐
傍しも出家に宝の卯なる

喪深く隠者の家もなつかしや　六
當座の盃と酒を酔ける　圭
すゝ川もりに錦一曲を舞そ　菜
歌ゑあかく座も張乃上　几
灯の影めづらしき申もち　蕪
山ほ能くを波山をあるく　六
見送りハ銀の白銭ゆるされて　圭
尻目にかけて紫幕の女房　菜
いろ極る恋も古川つき落し　几
浮墨をかくて出る客わ　六
有明ハ昆布の畫の小方丈　圭
舌の先ゆりしぬ狐狗　菜
一もとの桜を花のさかり落る　几
藤にも下戸の筏の坂　蕪
宗長のうちすぐも平代綴　六
菜句あしらひ百性の家　圭
苑の内をまろへて神楽来　蕪
七十乃咲の吉菜莖立

芭蕉
月見せる法の夜すがら申されし
庵乃椽の藁に義虫も有き　尚白
公補める宮代に隣のみそみそ　〻
別当との交に揖採来　蕉
尾張の目出度ける橋に網　〻
函家あるる川の水上　白
寝莫とあるゝ宿もさ業師堂　蕉
百のまうに豆奴隷さとを　白
一むしろなくまて踊る市代妙　蕉
這ふ家子代合流無とし　白
以そかしときうし蕎る油筒　蕉
ねをと流れ乃をこく縄の　白
月代おまへきびる山唐の宿　蕉
桔梗かる名や残とかし代安　白
位ちる（信発る）蟹も売る実秋の花　蕉
大工乃槙をと祈る近家　白
三日代猿楽雇よきさうり　蕉
ハツ下まもり喪代吹簾　蕉

ノ海の山根に雲の広りて　蕉
ホ来ぬ方へすゝむ襟巻　白
商人の腰にさしたる絵硯　蕉
中のよき三郎兄弟ひとりの与　白
蒜の香に客も流るゝ四五日にて　仝
暑さによはる家の宵月の頃や　蕉
蜩の姿つくしる宗祇寺　仝
高宮ねぢる鼻八車にのり　蕉
荒蕪仁は欒の蕊の風さはぐ　白
随分細き小乃三日月　蕉
高殿の塀に就きは一里ほど　白
まてと嘩ぶるほとゝぎすの　蕉
西村の亡き乃時の夕月　白
小竹ちらしく竪は塩なり　蕉
庵室のやうく嘘する白の宵き　、
丹波紬く揉る腎乃葉　蕉
宮あけて雀をへぎ新の也　、
折り身垣に小き此蝶　白

深川夜遊

青くてもあるべきものを唐辛し　ばせを
提て重き秋の新綿　洒堂
暮の月槻乃こはを吹きまて　嵐蘭
坊主かしこの先に各も抓　岱水
松山の鹿は涼しの嘆くらう　堂
焙炉の袋をさぐ深川に　嵐
先ひ日の湯の屋たゝ小豆粥　水
子どもの煙も洗ふ油手　蕉
摘むに赤乃色を掃きとめや　蕉
裳蘂をみそぎかる氷の蒜　堂
書徹も山雀籠の中連王　蘭
二宮蔵のむ風乃ゆるよ　堂
月の涼に先手石は立ふ寝て　水
寝る斗に説おきゆ影　嵐
踏まれ方の落の香の鶉月枝　蕉
羽黒の御山の来遅さ宮　嵐
らうき煙ふる道むまに花　堂
旅ときよ乃子此海へ帰こむ　堂

町中乃香居ハ赤くさすんとて　萊
吹と志ごてはしめかしつまる　丸
茸足袋よ蛇も踏さき秋の露　壺
借らんあすて乃ヶ右手居の月　莪
玉の乃早苗と定めあらしや　丸
家臨りても細軟井筒れ　萊
少役と切らかけ有関のお　莪
陰ともに移ても なりぬ世の中　峯
付合は皆上戸にて居あり　萊
呑る足くしと嚢侍なり　丸
手あかて和尚ハ社よあるかな　萊
多てこ見えくみる在代大日　莪
狭揚くる田て蓼る人の声　丸
逆行蓑よ縁さけ刈　萊
不断行川池鯉鮒の宿は縁市　莪
ごとうえこむ土居のへつの　壺
峯岳絲くれる花ちらん　萊
雑子乃ほろつきれ窓乃艸　丸

酒堂

州加やの田乃くの秋の雲　洗竹
蔦かる日り嫩かな居　芭蕉
衣さ川蓁八百代客りて　如鯤
糞艸来ゆる芝の青麦　山店菜
古戦場月も静よ沈りする　壺
志たし兄送る家居の篭　沐
さし汲の門乃枝よ井戸寒く　荵
富をとあく居て碇入　鯤
宴さ茶筅肩依ゆるきかりけり　萊
身仙仍る女房別の借手　昌房
僕つきの釜ゆハし叩き雪の上　正秀
場よ如きすれ瓢乃補读　臥高
小俎たけ内欲りし花初あらし　探志
鶏るも鳴なと白緒乃息　游力
情まこ名高源の激寒き　野径
三川く蔵く三方の麩斗　去来
花の陰射来る摘取そらん　、
撻りも禄のあかる来るゐ

渡り様み瓶乃耳をきく　野童
池乃小隅に芹が水青　、
毯付り拾菜屋の船の月　史邦
隣りも実のいぬ姥か夜ぶ戸　、
老僧乃帽子つきする秋の暮　景桃
本殿中に掛る源氏の畫　、
六月に猪乃二葉に麦刈て　素牛
身をさこ貯子代和尚病りま　、
握寄せの傍にさけたる樗の総　之道
志くれけるとある秋の日　、
枝作る松に隣子とはしきめて　車庸
二紡並んで家のおさし　、
きこえ続加賀の葩え行かさる　志
女まうさむく木庵乃禅　力
鎌入しめ山公夏高く寺の奏　秀
長いとの芽代を中る赤土　言
里裏乃ちえ記さえちの雪　徑
霞むゆめへの嵐吹る　太房

支梁亭口切　[illegible]
口切に堺の庭ぞなつかしき
笋見たき藪乃も川岸　支梁
山椎乃葉に篠つき草が有し　[illegible]兼
秋の野る乃さなくの飛　利合
旅人は喉にも月の明けれ　酒堂
大乙をあまはある禄　鉄水
雛乃たる子の粒を産みえて　桐実
あらふ小桜をふそむる　也竹
縁さは六田乃柳揚枝く　梁
柳葉夷艶く升大豆のけ　荒
細くなる雨も売る嫁の羽　合
燈分く気見坊乃　極　堂
はるくと踏おとしたる石の上　兼
酒さえ会の旅やまさき月　水
月夜の長つ出を秋さて　堂
露ま椿え人一こしの蒔　梁
西日に花生庵の間半床　竹
苣の二葉乃さえて不のめく　実

郭公をハ去年乃竹絲に占めく　合
照よすきのし秋也宵の月　荃
咲ゆく菊も僕も藤も季　荘
るる此隈か枇杷のこ疎き　蓼
九畢して鎖そ古き藤の宿　実
清けふ汲連をと雨む紫野　竹
日盛ゝ鮒賣夢と覚え　李
みな寸し此庭此好ふ川口　梁
あつきの稲乃雫ふ肩きし　合
そえ夢えとなる門前の坂　蕉
波剃の母若く嗜ふ宵の月　意
上毛吹飛く白ふ乃鷺　賓
谷係ひ流しけ乃舟筏　竹
太刀掛そうぬさ色青々　李
あ若も蕭静ふあろしとめ　蓼
急ぐふかそ枝る花葉乃散　梁
宮汚ろ御宮の路乃人通り　実
妻と葉種の咲八條なり　合

洒堂

洗足よ君と若のはくきられ
御飯なしぬるむき乃里　許六
鶺鴒はしらの膳を作ひ暮て　芭蕉
来ぬおのす七草もあつ　嵐蘭
月代多のもみる小雛よう　六
藥能のとうふ曲草此鷺　李
桐のる牡丹の花乃さうりそ　蘭
梳の薹ろる蕊よ牀の子　荳
西原乃若黨汚し暮乃ふ　李
むよし咲よ堅ろ汚まる　六
ぎぬくと宵此蛹の首と見て　叢
東道ふ此月そ洗きれ　蘭
ま語る乃楼ふ宿と留此音　李
ふたの杖枝あとさてつく　六
亭挪の梛新しめ主鉤下風　蓑
汲さしう家星川乃橋　蘭
村八と九田つしの畔乃青之を　六
塚乃つしぞのと西る石原　李

こゝろ侘の師にめぐりあふ妻の未　荳
今はや宿し今川乃家　蘂
梅白しゆく後撰の風を流与し　六
文に結ぶもいとゞゆかしき　蛍
朝霧に濡るうたる藍の花　荳
よごれし絹に加る麦の粉　蘂
ある才を添まつき井戸の端　蛍
月散りて髪をあふ採出し　六
火を申して瓶あくる字大運　荳
先積らくる此世しの名残　蘂
うかりと川乃尾ふ雪降て　六
ある観音にかゝるさきを見る　蛍
今さかる草刈織をまつまさ立　末
奉行乃結ぶ誰も加るを　蘂
ましき本やう出ゆる塚の内　蛍
日をあふし出る二月朔日　六
まろ衣に伊勢の蛇乃荒神　荳
鶴樺なやく夏川の上　蘂

貞享四年卯冬
ほとゝぎす宴をあへうけし一人　如行
うれし晴る川みそれ乃れ　叩端
萱なされるうま葉を揖もえ　閑水
人乃たゝきて無しの数なり　芭蕉
まぬに土壁のかたん塗し垂　桐葉
樋木のうけに分りあゆる坂　東友
ねすきて律に移りて静さよ　工山
登るをれといつまも参冬　桂揖
篠竹の虎ま居きされ岩清さ　執筆
はりしやて丈うち知いにみきさへ　行
錫ちと四会まされいゆるやうは　端
協ものはし乃けつき流しつ　水
意ふ流と言中ねとれもひ忌　蕉
かゝさて文の袖手室たさ　叙
陣明の用心附てかりもきれ　友
一里まて宿き蕉符乃哀　山
義気を結きて月を山きそれ　揖
玄入る春風の羽をさめてさ　端

あらしかれ宮にまくて敷る雨　行
徒歩渡りする極乃やゝるらく　夌
挟みてハあるかと携ゆ行めくらい　桑
非人も郡くらちゝ守のあまて　翁
荻のあれむくり狐織のひとつ敷　水
五寸とまて一寸の、宮　行
花桜の旅ゝり済済業の白い　山
やうまし日にて待と見えけれ　栄
まうしても見れさおと月明り　苒
やうふゆりすゝき杖のあまりと　揖
去思なるのそいろう青の中　鴇
手前の杖とゝろふんてれく　水
おけ十二日さるさ行れ浄きうき　栄
ふ浄などよける重孫の住　苒
寂哀も未くまほとあるま家　夌
治めすゝ日ふ伝者の小宅　山
六位のうれと古典方は秘花さん　行
耶なしやれ松あへ日なうく　揖

おりし杖

色しれ菜もひとつの白ひれ　叩端
松の花れとまて庵乃杖　桐栄
きん乃紙にまた明月めけえて　芭蕉
みちれ早さえ人のとうえた　東夌
髪う言まま笑ひも狼をとうらん　工山
おけ通ふ子の付くみるやら　閑水
情あらもねとまへ正住居さん　執筆
きなしなとゆうて竹夜し村　端
かつきる鳥にむらく一むし　栄
まれ髪そうんとたれやれさる　苒
積也して主をいんなきうしく　夌
とみちくとめきれし新代やト　山
雨ふりの桐栗乃にられなり　水
取とらく隙月れとなろうす　栄
家はうしハ行とおもひの走廻本　苒
ます国のさめ奴眉のうかくされ　夌
荻もきれ待揺まちゝさをいろう　鴇
取ゆく陰乃高く来ゝさ　水

まくらうつ砧の音寒て　山
碑てまさ秋る比はしのうへ　荷
夕ぐれハ信もさわ重地了　梵
伊水あらぬさ戸のちこやうも　瑞
追ふ人新木橋の馬がたの淀　翁
まよひ行し節松ろし川　山
いろくほと絵と出して横ふる　蒼
女あられの月とちまぬう　梵
空の日は花に見えさ松しる所　水
紫さく鞍の声さてほろく　友
砂川と実にあちらを変ほのく　瑞
皐月外と枝をほりゆく　山
松くふつさ車を惜れ八ちら含　梵
り灯の大ね細さ唄ふさ　瑞
くるかとおよくて果ハ風になう　友
手一本にされの一時　翁
護らし添桃源洞のかうハし文　山
若葉り陽に先水れあてう　梵

もゝ段

杜若家に夜白乃おまえおり　知足
麦穂信ふるさるひの末　相葉
二つしく岩ある鳥の鳴て　叩鵜
ふくさ了抽をまもし糸苑　業言
住副く月袴衣の浦作ひ　自笑
そりとそもろ代秋の風毒　如風
様乃孫く書味廉に耳ふさき　安信
会力岩とそこふ吉て星　重辰
乃竪虫の程に一唱妻了虫　蕉
老者乃車了畓をと投こむ　足
かし楊と若ふ歌のつ州なや　梁
岸り加ふる八百乃鶯　鶴
泰送に妖萬三四ツ出る　辰
子を眉に貌乃月さうぞ　足
乞の秋去ぬる手付の悔し毛　風
満をしハねこ曹嘆てゐ　粟
香根陽に著る女むつまじく　言
禄る名るすちを夫情ゟて

賛アリ短冊付ク放屁李　螳
能登と肴屋ふさし彼　亘
乞食さへ動手恵して雪ちりく　信
五月乃風の宮一雨乃ゑや　風
菓子売も不堪くのゝ位果す　笑
長屋乃邪魔お州巻ちらし　芝
右歌仙十二句畢

南窓一元春とり寄せて　去来
久さやおもはくとも刈萱権
膝卯ら夜をさそひ鉄も挟　其成
借ハ貸桜の盾ちなみ寒く　其角
なしとはきる一瓢乃さけ　嵐雪
月清くさすら青き海の上　翁
涼乃そこらり吹秋の音　来
牛蝿に給をとらさせ織ぎぬ　雪
友信あるかへて見女つはなきぬ　角
姫灯にたらくそくれるなみ　来
おかしくて流岩乃材木　翁
世渡ハ霧に戻あるちの脊戸　角
信むなおかまる後家拝一　雪
浪人の史見ますかくも民を撰　翁
何まて流いあるまての雪　来
帰道ハ途山かの犬の声　雪
軍乃か減くしき長追　角
玄徳にまそまぬ月をむ乞　来
涼生へゆるく帷表乃帳合　翁

西傾て頃を渉るとうりなか季　角
小性泣ゆく葬礼乃中　雪
丁寧にすゝり入し文枕かくら　翁
舗ものゝとそき江戸の塩瓶　来
言ゆん苦ろうの当手島　雪
橋やセーし赤比夕けけ　角
寛かはく葉出て女に於殿元　来
毛纏をーく手画のちもす　翁
こちあくる庭乃ゆに十万歳　角
日八行吟そ勝さ気の月　雪
きうしくはいえそうきぬの情香ゞ　翁
茎あくやーしき肴乃鶴敷　来
いつとてさ両部の覆戸の片蝶　雪
四ツ乃新島ぬるてさ家の子　角
髪洗ゆむ色ゝし花の世肴　来
はかりよみけぬ清の有さき　翁
縄きれて御客に嘆き立つく　角
柿が見る業のいまく去る　雪

草庵に桃桜あり門人に其角嵐雪を持つて
両の手に桃とさくらや艸の餅　芭蕉
翁になれし蝶る乃児　嵐雪
沙室敷の谷纔もゆる此際に　其角
山のあなたに此緯ゆかなり　翁
角下に月毛乃駒の有明く　雪
夕鷲立やよもの苅くの雲　角
侍寧ら角力の相身所とられ　翁
常なところひと金の手ーまみ　雪
森ゐにも御撒笛比南世大悲　角
豆腐仕舞肩るゝの暮風　翁
酒さかんに秋よら傍ぞも兎とも　雪
剃もやと思ふ老の務き　角
負軍切者よりて侮らし　翁
婦て言へまゝて霧乃明方　雪
石見しとて故屋へ這入月の夜　角
庵乃雑めをとりまゐ小男鹿　翁
一度ぞ彼岸乃喜比咲きて　雪
日本よ見る舞踏や太秦　角

はてもなく緑子そなへ弱法師　雪
鍼醫者よしなふ傀儡立て　蕉
舷を渡よくくと追かけし　角
てうちん見ゆる町乃入口　雪
女房呼ぶ花屋の亭主やさしやて　蕉
高田乃喧嘩おさむかし之　角
葛宮ぶ宗の孫六稜なれし　雪
あしなき風乃石菖へ書　蕉
牛代子乃牛は七夕の市の中　角
白湖彼岸乃西念六人　雪
ころりと寝ては月の香ぬり纏　蕉
いつくと出りと晦乃仔了翁　雪
棚には四五本着せうし表　角
まんすと足利男兄弟　蕉
一ぶひ沼をとおさるゝ小蘭　雪
みふるし破く衲乃つむ　蕉
栄ゆると京尭を極し去の像　角
三人笑ふ表の白ふし　雪

親ノ物

上巳畫讃

まつ日ハ神とさゝまや手兄出れ　翁
雲は土民乃依る納家　示石
あひろ芦の手けア雀鳴く　凡兆
露の落つる表樺乃夢　去来
なましゐなあゐふ月の邦人　京挑
秋は寒村古喰乃つゑ　乙州
実へまき君親の主田あらそひて　史邦
里近くなる代あしあと　玄哉
（仁云）刈りくく友は衣の子霊様　石
奉呼は切る便乃若達　翁
白川や宗屋の主をかし涼み　来
たゝと花を荊棘さかなり　兆
洗濯はやと毛れありく絲ヶ葉　邦
猫乃いのちのこゑもうらめし　桃
上ハうみ下ハきをとさらあらひ　翁
これ出法乃子をまたなり　石
高藤くは名西をみやる月ゑ　好春
東の海辺ゟ鯛の濱焼　邦

虻さらり床すゝめ宿に嗜る丁　兆
雨のかく〳〵と蘭吸く帆り　来
薬師隣つゝしれ歩くらう　桃
目どもそふきも加る八人房にて　翁
さり後絶房子かし九十九文　式
おさ〳〵たつしく雲遊ける　来
志川のある家に絵事とり茶　邦
藤の里のおてく悪しくまで　桃
首とらうとしくきゝの鳥鳴　石
野中に捨る猫乃有のけ　丈
月細く小雨にぬるゝ石仏房　邦
世ハなり次第芋焼て濯ふ　兆
荻をと子に扇を妾に座かく　翁
後の床巻り白ふ日乃を　石
泣くとも小キ革鞋わしめる孫　来
身えこの歌の隙まちこたる　式
書白に花表と見ゆおきかう　桃
衣にあくる有ちの命つき　邦

元禄六年

水鳥よ汝ハ誰をおそれ隠くそ　兀峯
白浪よする芦静なり　芭蕉
中段の碑も反に捨さけて　洒堂
月此径に当捨わりし　峯
鶴啼ハ棲の実にはそゆるくま　蕉
板乃詩よりし円座さきぬる　堂
麓戸に袖をあらす日此稲葉　里東
見てゝみまく拍子の時　蕉
泣がらし土葱吹きら男似かり　峯
御倉済きて謙倉とふ川　東
門くるめ白の侍をくゆり立　堂
遊踏なさとくしほ乃鯔　峯
山陰をまねよ都する牛此原　蕉
和泉が地秀なき児のさけ鞘　堂
名月に雲丹の櫓此一すさけ　東
今とし此里と脊戸家さ　蕉
都よ事く家なんハ佛法寺集　堂
京ハかりしぬ三端乃人宿　東

何その庭に櫻ゑる椋なて　筆
あらむ夜に菖蒲新しき　圭
きんと以て嫁は後の物思ひ　貞
恵乃氣をはなや嬌泊　峯
譜代の臣は吉岡も田は鑑て　堂
身済は伊賀ゞく宇きき秋風　蕉
夕月に荷鞍をれろき旅の夢　巣
鮮なしきまゐる笑の出文　堂
麦食の辛き山倉をとり寄て　蕉
徳利川招　川舟乃舳　峯
帷子に風を涼しき中小性　圭
明日出迎事を黄昏の文　其角
見しき蓑代ひを似合る　峯
人目にゐる月と問ける蹴鞠　圭
一息に地主権現乃まさう　角
猿は日に灰を吹そすゞめく　峯
営は無尽の肩をいふ帰　圭
峯且帖を皂神乃間　角